

603-222



1200501531042

603  
222



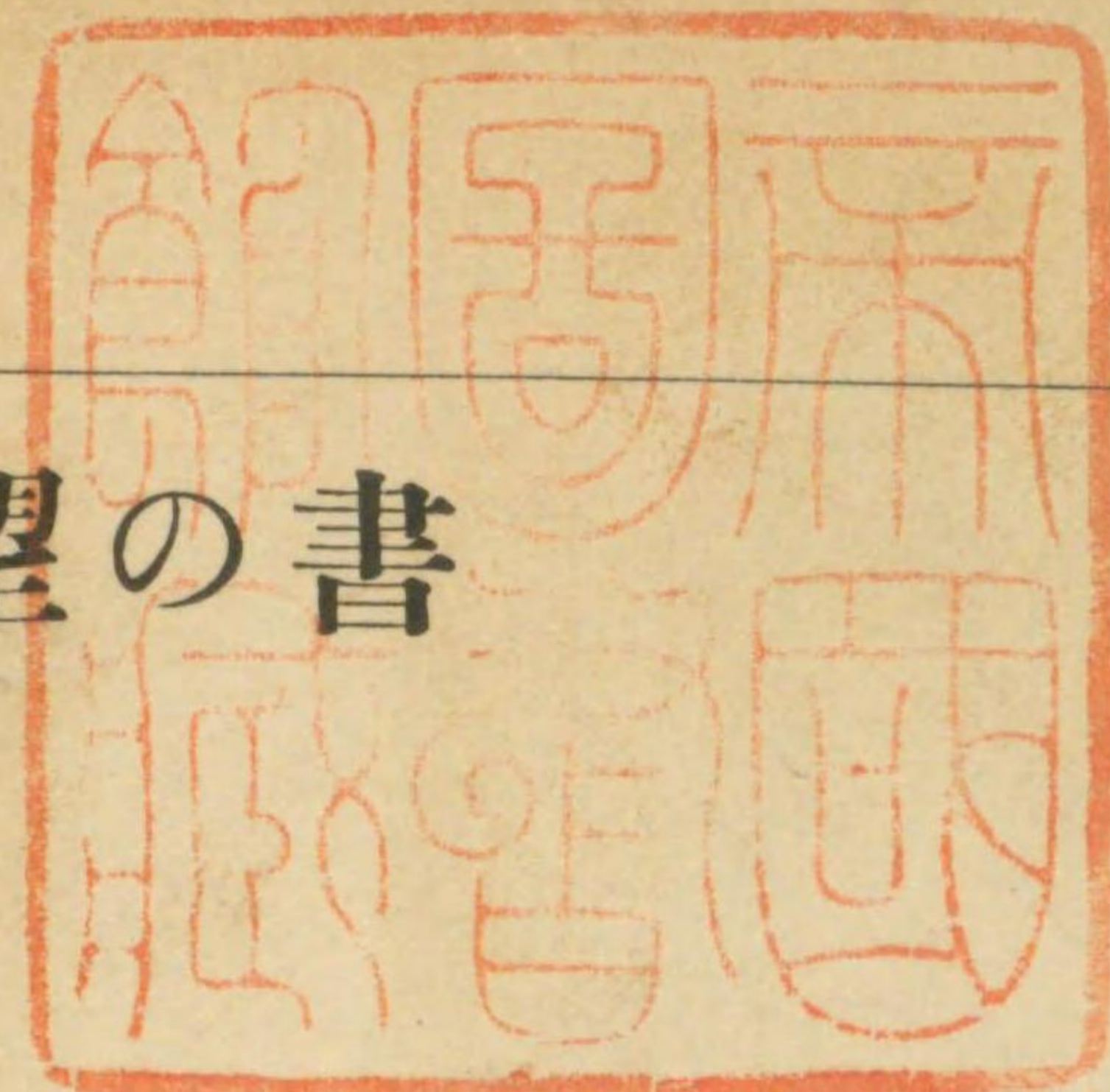
25 731



2-2261

古

絶望の書



辻潤著





辻潤先生巴里酩酊の圖

巴里はサン・ミシエルのテラスで、したゝか酔つぱら  
つたダダイスト辻潤、群がるパリジャンを相手に大島  
節、新ストン節を高唱する、更に興が乗るご通りが  
かりの紳士淑女を、日本語で思ひきりやつつけて、ヤ  
ーイ分りやがらぬか、サマ見やがれ！  
(上圖は巴里ヌーヴェル・リテール紙が載せた辻潤)



603-223

### 序

自分にとつて、生きてゐると云ふことは恥を曝らすと云ふことにしか過ぎない。またぞろ、かくの如き文集を出す所以である。この書を讀んで讀者はしばらく自己の優越をかんじ給へ。著者にとつてそれは聊さかの慰さめとなるのであらう。

自分はキヤメレオンであり、マソヒストであり、なんでありかんである。なんかんでんところんでんである。てんとして恥するところを知らざる猿でもある。去るものは日々に消え、行く者またかくの如し。かくていつまで生きたとて死ぬだけの話なり。なんすれぞそれ恐れざることあらん。あなかしこ、にひおろか。

笑和五年十月

洗足池畔情眠洞にて

陀ッ  
仙  
誌



安樂に納さまりかへつてゐる人間が自分に向つて云ふ——「明日のことを考へないで、どうして人は生きられるものか、頭の上に屋根なしに、どうして人は眠られるものか？」——と、だが災厄は無遠慮に彼を戸外に又家庭外に放逐する。彼は恐らく垣根の傍で眠むることを餘儀なくされるであらう、彼は色々な恐怖に襲はれて眠むることが出来ない。野獸もあるだらうし、自分と同じやうな浮浪人に出遇ふこともあらう。だが、さうして歩いてゐる間には次第にそれに慣れて来る。しまひには純粹な浮浪人になつて行きあたりパツタリに自分を任せるやうになる、さうして溝の中へも眠られるやうになる。

レオ・シエストフ

### 絶望の書 目次

#### 巴里の下駄

|               |    |
|---------------|----|
| えりと・えりだす      | 三  |
| 榛名丸の二等船室より    | 一〇 |
| やつと三分の一       | 一〇 |
| さまよへるギター      | 一二 |
| 新手の刺青氏        | 一五 |
| Three Monkeys | 一七 |
| 巴里の十日間        | 二二 |

目次



ドームとエレンブルグ ..... 五〇

子供の居ない巴里 ..... 五三

按摩上下二百文 ..... 五五

巴里のセムシ ..... 五七

うるさいブル・ポアール ..... 五九

無想庵との邂逅 ..... 六三

西洋から歸つて ..... 七一

歸朝漫談 ..... 七七

巴里コンニヤク問答 ..... 八一

高いマツチ ..... 二二

南方旅館 ..... 二四

あんちもごるぬ ..... 二七

此處が巴里か ..... 三〇

葡萄酒と大菩薩峠 ..... 三〇

十三時 ..... 三三

日本がいいよ ..... 四二

無軌道電車 ..... 四二

ギヤルソンス ..... 四四

そうですかね ..... 四七



絶望の書

ものろぎやそりてえる……………一三  
ふらぐまんでざすとれ……………一五二  
どりんくごうらうんど……………一六  
幻燈屋のふみちやん……………一九二  
陀々羅行脚……………二四  
博多から長崎まで……………二六九  
島原と天草のグリンプス……………三〇三

目次

かれ等果して何を求めつつありや?……………三八  
うんざりする労働……………三三  
書齋以外……………三七  
無想庵のプロファイル……………三四三  
Mの出家とIの死……………三四七  
インキ壺のタイタン……………三五五  
「虚妄の正義」……………三六五  
メカマをちどる……………三七三  
ふわんたじあ……………三九四



# 巴里の下駄

こんとら、ちくとら…………… 四〇〇

— 目次をばり —



ぞりとぞりたす

なんのためにフランスなどへ行くのか？——旅行免状にはちやんと「文學研究」と書いてある。自分は文士だからフランスへ文學の研究に行くのだ——それ以上に私はあまり考へたくはないのだ。

昔は「洋行」と云ふ言葉に恐ろしい價値があつてまるで神様の「護符」でも頂くやうな氣持のする時代もあつた。猫も杓子も洋行さへすれば肩で風を切つて歩いてもしつつかへないといふ様な馬鹿氣な時代もあつた。今ではどうか？ 洋行をするとかへつて生れた國の時勢に遅れるやうな氣がする位だ。

自分は少年の時からハイカラでとかく西洋臭いことが好きだつた。十五六の時分にはもう一人前のクリスチアンで、横文字の書物にばかり讀み耽つた。



内村鑑三先生の「警世雜著」を愛讀してゐる時分、ひどく先生の影響を受けて米國のカ  
レヂ熱に浮され、金の問題はそつちのけにしてしきりに入學試験の研究に耽つた。昔か  
ら、自分の家と深い關係のある或るブルジョアのところへ出かけて洋行費を出してくれと  
頼みこんだこともあつたが、勿論ものにはならなかつた。

武林無想庵と叡山で暮らしてゐる頃、無想庵は私をバリーへ連れて行つてくれるやうな  
ことを云つてゐたから楽しみにしてゐたのだが中平文子にひツかかつたので私の洋行もフ  
イになつた。

三四年前、谷崎潤一郎君が洋行をしかけた時も、私はどうかして一緒に出かけたいと思  
つて色々奔走したが、當の谷崎君が中止をしてしまつたので自然私の方も立ち消えになつ  
た。

震災後、私は東京にゐるのが不愉快なのであちこちと田舎まはりをしながら暮らした、  
氣まぐれに朝鮮の方まで出かけた。——つまりこの四五年と云ふものは殆ど旅で暮らして  
ゐたので、在京の諸友とも従つて遠ざかり勝てひどく御無沙汰をしてしまつた。物を書く

よりも私はひとり勝手放題に山川を放浪して歩いてゐる方に自分の藝術的感興？を見出  
してゐた。

私は一昨年の春頃から或る人の温情によつて大岡山へ移り住むやうになつた。さうして  
僅一年半位の間に四度引越しをした。現在の家はその四度目の家なのだ。この一年有半の  
生活はまツたく言語に絶した窮迫ぶり、到底他人の親ひ知ることの出来ぬ程に徹してゐ  
たのだが、私はそれを耐へ忍ぶことに興味？を覺えた。負惜しみと嗤はば嗤へ！強情と罵  
らば罵れ！

さて、風の吹きまはしで私は卒然として洋行することになつた。まツたく棚ボタである  
寢耳に水である。しかし、時節が到来して多年の宿望が達せられたわけだ——しかも自分  
のと名のつく金でだ——まツたく人間萬事塞翁が馬である、とりあへず喜んで見たのだ  
がひるがへつて考へると少からず「季節外れ」の感があるのだ。

自分も今では立派な四十男なのだ。人間四十有餘歳にもなれば、どんな阿呆でも、一通  
り世の中がわかり、娑婆の合點がゆく筈である。自分がどんな性情の持主であり、どれ程



の才能があるか位は見當がつく筈だ。フランスへ行つたからと云つて、忽然として生れかはるわけでもない位なことは自分と雖も萬々承知はしてゐるつもりである。

さて、私もひとりの文學者ではある、と云ふよりもいつまでも幼稚な文學書生をもつて自任してゐるのだ。私が今迄に全體どんなことをしたか、どの位な文學上の仕事をしたかと考へて見るとまつたくお恥かしい次第なのである。だから私は御苦勞にもヨーロツバくんだりまで出かけ、もう少し了見を改めて自分のダダ的精神に研ぎをかけて見たいと考へてゐるのだ。

私が日本の現在の文學をどんな風に考へてゐるか云ふことはしばらくお預かりとして少くとも自分の『文學』はまだ一駄目だと云ふことだけを私は痛感してゐるのだ。他人がどんなにすぐれた『文學』を製作しやうが、自分のものが駄目ならまつたく駄目なのだ。私の思想や、生活、状態がどんなものであるかと云ふことはみなさん先刻御承知の筈である。私が西洋へ行つたからと云つて、それ等のものが遽に改まるわけのものではあるまい。

私は自分の洋行をなにか特別な意味に考へたくはないのだ。今まで日本のあちこちを歩きまわつた延長だと考へたい。至極アツサリした氣持で出かけたのだ。ただ困つたことには生れて始めて「海外文學特置員」などと云ふ厄介な大任を背負はされたことだ。自分は果してよく期待にそむかないやうな仕事をなしおうせるかどうか勿論やつて見なければわからないが、今の自分の氣持では出来るだけやつて見る積りだ。だが「待て！ しかして見よ！」などと妙チクリンな言葉は發しないからその點は安心してもらひたい。

私は頭がハイカラな癖に、身體ときたらコイツ恐ろしく東洋人なのだ。特に「食物」の點に至つてはひどいエドツ子なのだ。「食ひ物」のことを考へると私はもう一溜りもなく情氣かへつて「洋行」なんぞ問題ぢやなくなるのだ。若し私が西洋に行つてホームシックに罹つたとしたら母親や、戀人（ありや？なしや？）のことを考へ出すよりも、一番に味噌汁や香ノ物のことに思ひ到るであらう、

それから、同行の子供のことだが、始めは連れて行くつもりでもなかつたが、子供がしきりに行きたがるし、考へて見ると、日本で中學程度の學業を終へたところで自分だけの



飯が食へるか食へないかまつたくわからないと云ふ程の御時勢なのだ。考へるとまつたく  
慄然たらざるを得ない。それに入學試験と云ふ兒童等にとつて世にも恐ろしい難關がある  
一體これからの子供達——特に貧乏人の子供達はどうして生きてゆかれるか賢明な御仁に  
伺ひたい位なものでありやす。

幸ひ私と同行する息子は多少の畫才があるので、向ふへ行つてまかりまちがへば畫描き  
(になられてはオヤヂは實は閉口なのだ)になる可能性がありそうなので、當人の爲に  
は向ふへ連れて行く方がいいのぢやないかと云ふ漠然とした氣持から連れて行く氣になつ  
たのだが、もとよりアヴンチュールではある。しかし、日本にゐる銀座をブラつくモダー  
ンボーイになるよりはバリエイのモンマルトルでアバツシユになつた方がまだしも氣が利い  
てゐるかも知れない、これはジョークだが、私はまつたく駒の出ないことを心から祈つて  
ゐるのだ。

このアンチ・ビジネスマンは船へでも乗らない限り、一向まだ西洋に出かけるやうな氣  
がしないのだ。しかし、道草を食ひ過ぎて乗り遅れるやうなことがあつては大變だから、

ゆつくり原稿も書いてはゐられない始末だ。

出發前に出来るだけ世間の義理を片付けて行きたいと思つたが、思ふばかりで一向にハ  
カがゆかず、ゲツゲツしてゐる間に東京驛を出發することになつてしまつた。では諸君御  
機嫌よう。Au revoir! (一九二八、一月)



## 榛名丸の三等船室より

やつと三分の一

やつと三分の一ばかり漕ぎつけたところだ。今日の午前十時半頃新嘉坡を出て船は今馬拉加海峡を通過してゐる。明日の午前四時頃には彼南に入港する筈になつてゐる。なにしろ眞夏で朝から汗を滴らしてゐる。しかし三等船客の特権のありがたさで、誰れに遠慮もなく、朝から晩まで浴衣がけで押し通してゐる。風呂はたいいてい毎日たつので、湯あがりにはバアでナマを一杯ひっかけ替はつたからとて罰も當るまい。なにしろ陸上にゐるのは生活様式がまるでちがふので細胞はさぞ面喰つてゐることだらう。船へ乗つたら旬日の疲労か一時に出て一週間位はいくらでも眠れた、まつたく三度の食事以外には文字通り寝てくらしした。健康は頗る上等。それに酒(日本酒)を殆ど飲ま

ないので朝飯を何十年振りかで食べてゐる。この分で行けばマルセイユに着くまでには一貫目位はふえるかも知れない。

特三の飯は洋食なのだが、私は二日目から朝と晝だけ三等の和食を食べてゐる。まつたく三度く洋食なぞ食べたものではない。子供は船へ乗ると毎日パンと洋食が食べられると恐ろしく楽しみにしてゐるが、これも五日目位から閉口して、私の分をへづつて食べてゐる。ひどく洋食に幻滅を感じてゐるらしい。昨夜は久しぶりで冷奴にありついたが、ほんの三口か四口でペロリと平けてしまつたので甚だもつて物足りなかつた。

船へ乗つたら久しぶりに日記と云ふものをつけて見やうと殊勝な心懸けを一寸起して神戸でノートを一冊買ひこんだが今に至るまでまだ一行半句も書きこんではゐない。いや、日記を書かないばかりではなく、フランス語の勉強もまるで出来ない。しかし、それには甚だ理由があるのだ。

今、私のゐるAと云ふ室にはバンクが十一號まであつて、日本人が私達ともで五人、異人が五人、總計で十人、部屋は満員で荷物を置くところもない始末だ。日本人の二人は若い



男で神戸あたりの商人ださうだが、アントワープでなにか郵船に關係のある仕事をやつてゐる兄キのところに行くのださうだ。

さまよへるギタア

上海から鳥打を被ぶつた眞黒な巨人がボロ／＼のサツクに入つたギタアを擔いでわれわれの部屋へ入つて來た。私のに比べて三倍もする右手に一杯薄汚い繻帶を巻いて肩から吊つてゐる。入つて來るといきなりなにか話しかけたが私にはなんのことか一向わからなかつた。やがて、またひとり鼻が恐ろしく反／＼りかへつた赤い顔の異人にしては丈の低い男がやつて來た。この男の云ふことは少しは私に了解出來た。

御相互に朝晩狭い部屋で鼻を突き合せてゐるのだからさう／＼黙つてもゐられず、遠慮してゐられない。なにしろ先がまだ長いのだ。

黒い巨人、名はジョン・サンタレイー日本の横濱や、神戸はかなり知つてゐるらしい。

始め入つて來た時は四十前後かと思はれたがよく見ると五十近いやうだ。ところが段々話して見ると六十四五らしいが自分でも年はよくわからないらしい。國籍はボルトガルだがオヤヂは生粹の阿弗利加ださうで彼は一見どうしてもニグロだ。若い時から船へ乗つたらしく、世界中港ならどこでも知らないところはないらしい顔付をしてゐる。マドロスの見本見たやうな男である。亂暴なビジョン・イングリツシユで彼の云ふことは一週間位つき合つてゐても、三分の一位しかわからない。日本人は親切だとか、ムスメさんが可愛いとかしきりに最初から御世辭をふりまいてゐるが、どうもよく聴くと満更の御世辭でもないらしい。彼は恐ろしくアメリカに反感を持つてゐるのだ。彼は毎日何遍となく怪我をしてゐる手のことを繰返し氣にしては、

「痛いイタイ」と日本語で云ふ。彼の説明するところによると、神戸で或晩（勿論、例の元町裏のチャブ屋らしい）日本の水兵がアメリカの水兵と喧嘩をしてゐたのを向ふが大勢なので、自分が加勢をしたところ、とう／＼アメリカの水兵にナイフで手を刺されたといふのだ、その話の間に彼は度々「コンゴウサン／＼」と云ふ言葉を連發するので、私はな



にを云ふのだからサツバリ見當がつかなくつたが二三日たつて、それは「看護婦さん」のこ  
とだと云ふことがやつとわかつた。神戸の病院で綺麗な「コンゴーさん」から非常に親切  
に世話をしてもらつたと云ふことなのだ。手を怪我してゐるのでギターが思ふやうにひけ  
ないと、彼はうるさく辯解するのだ。その實ギターは勿論たいしてうまくもないらしいが  
六十以上にもなつてトランク一ツとギターを唯一の財産にして海を渡り歩いてゐるこの老  
水夫のことを思ふと、私は感慨無量である。彼は子供もないらしい。ニグロ特有の善良さ  
が表はれて顔は一見人間離れをしてゐるが實に單純なオヤヂで、日本には先づ餘り類型を  
見ない人物である。

赤い顔の反鼻氏は實に立派な體格の持主であるに拘らず、やさしい聲で、顔付から云つ  
ても中々のユウモリストである。國籍をきくと、彼は I am Bohemian と答へたので、例の  
戲談だと思つてゐるが、彼はまことのボヘミア人で獨逸型のチエツクスロバキヤで、建築  
技師だと云ふことだが、この男の云ふことは八分通りわかる。「君は私より正しい英語を饒  
舌りますね」などと彼に御世辭を云はれて私は恐縮してゐる。まつたく私は何十年ぶり

で——と云ふより、こんな風に毎日英語を饒舌らせられたのは生れて始めて始めてだ。異人の友  
達をとう／＼ひとりも持たなかつた私は日本にゐては遂に今迄英語を話す機會を持たなかつ  
た。だから話がどうしてもブツキツシユらしい、それでチエツコの紳士から「正しい英  
語を話しますね」などと冷かされてもまつたく仕方がないのだ。

### 新手の刺青氏

ヴェルモ・シユレモ——と云ふのが彼の名前である——氏の話すところによれば、彼は  
歐洲大戰に参加したらしく、數ヶ所に負傷の痕跡のあるのでも嘘ではないらしい。しばらく  
くロシアの牢獄にゐるが、そこを逃れて樺太の方に落ち延び、或る親切な日本の商人に助  
けられて、その人の世話になり、衣服旅費等を恵まれて、上海に行き、やうやく上海で事  
業の基礎を得、爾來、上海を根據地として息子を呼びよせ、自分は専ら外交の任に當つて  
輸入商を營んでゐると云ふのである。彼は今迄世界を週航すること凡そ二十回？に及ん



でゐると吹いてゐるが話半分にきいてもたいしたものである。しかも實際、二三度も廻つたらなんでもなくなるのかも知れない。

香港から新手の異人が二人入つて来た。いづれも三十二三位であらう、ひとりは一才オスカア・ワイルドに似た男で、上品な感じを受けるが、もうひとりは見るとプロレタリア然として、兩腕に刺青をしてゐるのを見ても正に船乗りであることがわかる。

なにしろ狭い部屋に鼻を突き合せてゐるので、御相互になにかしら饒舌らなければならぬ。二日目からもうすぐと馴染になる。

新手の刺青氏はアドルフ・サンデイと云ふノルウエジアンで、これも甚だ怪し氣な英語を話す——そんなことはどうでもいいが、来た翌朝、私は景氣のいいダンスミュージックで眼を醒された。見ると、もうビール瓶が四五本並んでレコードが廻轉してゐるのだ。私の顔を見ると早速グラスをつきつけて飲めと云ふ。酔ひ醒め以外に朝つばらからビールを呑んだことがないので、一寸めんくらつたが敢て飲めない程の柄でもないから云ふがままに二三杯の馳走になる。朝飯のしらせが來ても、かれ等ははまだ呑むことをやめない。さうして饒舌りづめである。

これが一日や二日位なら別段私も驚きはしないが、なにしろシンガポールを出ても、未だに毎日かれ等は續けてゐるのだ。しかも、朝と云はず、晝と云はず、晩と云はず、まるでビールの泡の中で、寝たり起きたりしてゐるのだ。どうも、こんな連中は例外かも知れないが一才日本では見られない。

“Three monkeys”

ワイルドに似た男は一番無口でひどいアル中らしい。顔も温やかだが、話も小聲で始終微笑してゐる。スコットランド人で、グラスゴウの大學を出たのださうで、一番物がわかつてゐるらしい。やはり船乗りではあるが専門はケミカルエンジニアだとのことだ。なんでも數年來、支那のあちこちを歩いたらしい。漢口にも長くるたことがあると云ふ。或る月明の晩二等のデッキで酔つた揚句午前三時半頃まで二人で話した時に、彼はケレンス



キイのことを一寸口にしたが、私が少し興味を持ち過ぎて追究したので、彼はそのまま御茶を濁してしまつた。どうも話の様子ではケレンスキイの下でしばらく働いてゐたらしくボルシエヰキイに對しては好感を持つてゐないらしい。しかし、彼は私の見るところでは恐ろしいデスベラで、人生は日本の「Three Monkeys」に限るなどと云ひだすのだ。一寸わからなかつたが、彼が手眞似をしたので、すぐと彼が庚申塚の「三猿」を意味してゐるのだとわかつた。申々洒落れたことを知つてゐるなと私は感心したものだ。この男、名はジエム・マツキンレイと云つて育ちはブルジョアらしい。

シンガポールからまた二人新しい客が這入つて來た。チエツクの紳士は此處で上陸したが、私に丁寧な紹介状を残して行つた。つまり彼の娘に宛てたものでボヘミヤの有名な黒森に住んでゐる才媛にだ。私はいつか其處を訪ねることを彼に約束した。

入れ替りにやつて來た二人は勿論別々でひとりとは二十前後の瘦ぎすな青年で英國のボーイスカウト然としてゐる。もうひとりとは短軀の快活な壯漢でこれも船の刺青を胸にほどこし、兩腕に金星と女の像を彫つてゐるのでこれも船乗りだと云ふことが一見してわかる。

青年の方はオーストラリア生れの雜種兒らしく、壯漢はポーランド生れのドイツ育ちで、フランクマリノスキイと稱し、私と口をきくや否や、すぐさま獨逸の自慢を始め、しまいにはゲーテ、シルレルをひき合に出して、なにかしきりと獨逸人のエライことを吹聴し始めた。至極無邪氣な男で、どう思つたか遇つて話を始めるが否やすぐと私をバアに連れて行つてビールを御馳走してくれた。かう今つから異人に最負にされては末が思ひやられると私はひそかに腹の中で苦笑した。

フィリスチン氏は酒を少しも呑まないのかわれわれの仲間外れである。一寸數へただけでも六ヶ國の異人種が集まつて毎日一知半解の會話をとりかはしてゐるのだ。いちばんよく饒舌るのはニグロボルチユガルのサンタレイで柄も大きい聲も大きく一週間程したら私はまつたく饒舌り疲れてしまつた。どうも異人のオシャベリにはつくづく呆れかへつた。これで女でもゐたらなほ騒々しいにちがひない。

上海、香港、新嘉坡、彼南、みんな上陸して見物した。これ等の印象はまた後から書いて見やう。しかし、いづれも落ちついて住んで見たいと思ふやうなところはまだ一つもな



いと云ふことだけを報告して置く。

船は今アデンを出航してボードサイドに向つてゐる。あんまり平穩無事な航海なので寧ろ少々あつけない。それにまだ海豚、鯨のたぐひにさへ一度もお目にかからない。海は荒れないと、海中の奇獸妖魚も現れないとのことだ。飛び魚位ではまつたく御話にならぬ。いづれまたゆつくり次便にて。

## 巴里の十日間

高いマツチ

來てから十日あまり経つた。毎日ハガキや手紙を書くことに忙殺されて、まだ碌にも見物もしない、まあゆつくりと落ちついてからのことにしよう。

三日の日に始めてリユクサンブルグの公園をブラついて、「デイリーメール」をひろひ讀みしながら、御雛様のことなどを思ひ出した。臘梅？ があちこちにチラホラと咲いてゐる。噴水のある池で子供が玩具のヨットを浮べてゐる。腰掛けて新聞や雑誌を讀んでゐる男女毛糸の編物をしてゐる婆さん、毬投げやマーブルを轉がしてゐる子供等、——なにしろ東京の公園よりも遙かに靜かだ。塵埃のたたないのが一番ありがたい。陽氣も春めいて小鳥が囀つてゐる。



新聞には日本の記事は殆ど見あたらない。偶々あれば國債がふえたと云ふやうな記事がほんの申譯のやうに片隅にチョツピリ出てゐるきりで、後はリエイラモンテカルロで何が公爵が一晚に何萬法の晚餐會を催したとか、自動車の運轉手が三晩で何千萬フラン儲けたとか云ふやうな記事ばかりだ。一向に面白くない。

こつちへ来て日佛銀行で始めて日本の新聞を見て、九條武子夫人御逝去遊ばされたことや老女義小清が死んだと云ふやうなことや、安部さんが代議士になつたと云ふことなどをまつたく甚だ遅ばせに知つたわけだ。これからも萬事この調子で一二年も経つうちには日本の時勢に十年以上も遅れてしまふに相異なる。フランス語か讀めないので當分フランスの新聞が讀めず、一番高い「デイリー・メール」や「ニュース・オブ・ゼ・ワールド」などと云ふ週刊新聞でも買つてせいゝ泰西の事情に遅れないやうにしなければならぬ。とにかく、まだやつと十日あまりだ。なにがなにやらサッパリ見當がつかず、メトロ(地下鐵)と、葡萄酒が安い他、すべての物價は聞いてゐたよりもズツと高く、こんなに高いならやめにすればよかつたと思ふことばかりだ。尤も田舎へ行つて生活すれば安いのだら

うが、そんなことを云へば日本にゐるたからと云つて田舎住ひをすればいくらでも安く暮らせるわけだ。折角、パリイくんたりまで来てケチ／＼暮らさなければならぬぞはまつたくなつちやるない。せめて半年でもいいから、少しは華やかな生活をして見たいなぞと柄にもない考へが起る。

出發前に神戸で巴里案内などを買つて船の中で讀むつもりでゐるが一向讀みもせず、全然オツフハンドに著いたらどうにかなるだらうと云ふ横着を極めこんで来たが、百聞は一見で、物の本で讀んだことなどはまづたいして役に立つものぢやない。それに色々なことが一切わかつてゐたら、外國へ来てても一向面白くはあるまい。まごまごして、自然にイロハから覺えるところに興味があるのだと云ふやうな理窟をつけて當分は暮すつもりだ。

日常品で僕のやうなタバコ喫みにとつて一番こたへるのはタバコとマッチの高いことだ。タバコを二箱節約すると、一度飯が食へると林(倭衛)が云つてゐるが、まつたくそれはほんとうだ。だから、僕は飯の方を節約してタバコを喫むことにしてゐる、一番安いエレガントと云ふ奴が二十本入り二法と二十五サンチーム、ざつと二十三錢位にあたる。マッチは



スキーデン製の硫黄臭くないつまり日本の普通のマッチ五十本入りが三錢だ。ところで、先にも云つた通り、安いのがメトロで二等なら六十サンチムつまり何處まで乗つても六錢だ。それから葡萄酒が四合瓶で普通三フランから四フラン——まあ五十錢しないわけで、林は飯の時には必ず一本づつ平けてゐるやうだ。僕はまだ葡萄酒の味が一向わからず、サツバリうまいとは思はないが、水のかはりに、或は茶のかはりに毎日飲まなければならぬので仕方なしに飲んでゐる。今にキツト味がわかつて來るに相異なる。なにしろ、日本の酒のやうに變な酔ひ方をしないから甚だ無事で少量なら勿論身體にいいにちがひない、石川三四郎氏は僕の送別會の席上で「辻君には別に云ふこともないが、フランスへ行つたらまあせいふく葡萄酒を澤山呑んで來てもらひたい」と云ふ錢別の辭を與へられたが今の調子では澤山は呑めさうもない。

### 南方旅館

僕等の今ゐるかりの宿は巴里十四區のモンスリイ公園街、四番のホテル・デュ・ミイデー（つまり南方旅館）？ と云ふ勿論大旅館ではないが、小綺麗なホテルで、中央から離れてゐるから比較的静かなところだ。娘が英語を話すので、わからぬ時は一々彼女の御厄介になるわけだが、後の連中は一切おかまいなしにペラ／＼やらかすのでまったく閉口だ。

此處からはリュクスンブルグ公園も例の羅典區も約十二三丁でまづあまり遠くはない。例の羅典區には支那料理が二三軒あるので、時々其處へ飯を食ひにゆくがボーイがサツバリ英語を饒舌らないから弱る。それに同じ廣東料理でも日本へ來てゐるのはまるで名稱がちがつてゐるので、見當がつかないが定食はまづ一番安いところで五十錢で食へる。米の飯にありつけるわけだ。

なんと云つても豫定通り食ひ物に僕は一番ヘコタレてゐる。そのうち自分の口に合ふフランス料理を發見してやらうと考へてゐるが、それはまづ當分はむづかしからう。スープや、バター、パンは、だが何處で喰べてもうまい。しかし、元來好きな方ぢやないから、自炊生活を始めない限り、まづたくやりきれない。



カフェは何處へ行つてもくさる程あつて、いつでも人間が集まつてゐる。つい僕のゐる近所にも數へきれない程あつて、オリエンタルとか、ビュファ、ロオとか、リオンなどと云ふのがある。リオン即ちライオンだが銀座のライオンのやうに勿論澤山の美人連がゐるわけでもなく、おかねさんがゐるわけでもない。御承知の通り、何處のカフェでもこちらには女給さんはひとりもゐないので、氣のきいたギャルソンがゐる、御客より立派な顔付をしたのが澤山ゐる。ギャルソンの中にはかなりブルジョアがゐるとの話だ。どうせギャルソンになる位なら、バリーのカフェで務めるに限る。

マルセーユへ著いた日本人は先づたいいて園田と云ふ男の世話になる。荷物や汽車の切符や宿などは萬事この男が始末してくれる。兼ねて林にきいてゐたので、僕等もこの男が船へ来たら頼んでくれと云つて置いたが、中々来てくれなかつた。船は朝八時頃ついで、午前十一時頃にはたいいて降りる連中は降りてしまつたのだが、僕等はいつまで経つても降りることが出来ず、例のインタアナシヨナル・ドリンキング・ソサイテイを開催して別離の宴を船底で開いて悠々としてゐるが、あまり來ないので少々心配になりだした。とう

たうそのうち晝になつた。仕方がないので、かうなつては園田を當にしてはゐられないので、誰でもいいから自動車で日本のホテルへつけてもらへば、その先はどうにかなるだらうと、ボーイにその旨を命じたら、税關は二時まで休憩だから、降りても無駄だと云ふので、なんのこつたと再び腰を落ちつけてしまつた。

#### アンチ・モデルヌ

二時過ぎてから、やつと船へ來る青物屋さんの手代かなにかをやつてゐる人に一等のボーイさんが頼んでくれたので、やうやく船から降りることが出来た。

税關は至極アツサリしたもので僕等の六箇ばかりある荷物の一個だけをチヨット覗いただけで「ウイウイ」とかなんとか云つてそれでおしまひだ。

曙と云ふマルセーユ唯一の日本旅館兼料理屋へつくと、其處には先著の一二等の連中が澤山來てゐる。さうして園田と云ふ男がしきりになにか饒舌つてゐた。



君の來るのを待つてゐたのだがどうしたのかねときくと、少しも存知ませんでしたので平氣な顔をしてゐる。つまりボーイがさう云つてくれなかつたのか、或は一二等の客の方が急がしくつてこつちをオミットしたのか、とにかく日本人で特三に乗つてフランスへ來るなぞ云ふ人間はあまりゐないので、始めから特三は無視してしまつてゐたのか、いづれにしても僕等は眼中になかつたらしい。

午後七時五十分にパリイ行の急行が出ると云ふので、それ迄町を一すぶらつきO君からかねて紹介されてゐたT氏を領事館に訊ねた。T氏はゐなかつたが、間もなくかへつて來ると云ふので待つてゐるとやがてかへつて來た。私はとりあへず無想庵の消息をきいたのだがT氏は一向知らなかつた。實はニースはまあ管轄地なのですがどうも——と云つた調子なので、それ以上きくことも出來ない。案内の園田にきけば武林さんはどうにニースをひきあけられた筈ですとのこと、こんなことならもつと詳しく「改造」で最近の消息をきいて置けばよかつたと些か不安な氣持になつた。

しかし、パリイへ著いた當日早速日本なら銀座に當るグラン・ブルーールを林にひき

廻されてゐる時に、Aと云ふ人にあつて、その人がよく無想庵を知つてゐる筈だと林の云つた通り、最近ニースから出て來たA氏によつて早速知ることが出來た。二三日過ぎて一番に書いたのが無想庵宛の手紙だつた。それからまもなく彼から返事が來た。

パリイの第一印象は東京と比べて全體に餘程古風な感じを受けた。瓦斯燈などついてゐる裏町の靜かなところはまつたくアンチ・モデルヌだ。歩いてゐる男女の服装もおしなべてジミである。なによりありがたいのは英國やメリケンのやうにノッポのゐないことだ。どうせひと月やふた月では見當のつく筈はない。追々と手當り次第出たとこ勝負に諸君がとくの昔に知つてゐるやうな事をさも珍し氣に報告することとしよう。



## 此處が巴里

### 葡萄酒と大菩薩峠

パリーの人間は茶や水の代りに葡萄酒を飲んでゐるらしい。仄聞するところによるとパリーの水には石灰分が多量に含まれてゐるからあまり飲んではよくないのだとのことである。勿論、清涼飲料は色々あるらしいが葡萄酒の方がズツト安直らしい。道路工事の人手達などでも、たいていみんなカバンの中に瓶を二三本入れて仕事の合間にパンを嚙じりながらガブガブやつてゐる。葡萄酒をガブ／＼飲みながら土を掘りかへしてゐるなどと云ふと日本などでは一寸見當がつかない。パリーではそれが家常茶飯なのだから仕方がない。茶も飲めず、水も飲めなければ葡萄酒でも飲まなければならぬ。僕のやうな液體を多分に要求する體質者にとつては是が非でも飲まずにはゐられない。従つてウマイとは思はな

いが毎日必ず一本や一本半は飲んでゐるわけだ。近頃では少しばかり味がわかりかけてきたやうではあるが、しかし決してウマイとは思はない。

酒をしばらく飲まないのでもまるで狐に憑まされたやうにボンヤリしてしまつた。興味索然として世界が灰色になつてしまつた。灰色と云へば巴里の建物や、樹木や、全體から受けるかんじはたしかに灰色だ。尤も若葉が少しは芽を吹いては來たが、それでも灰色だ。あながち自分が酒をやめてしまつたせいばかりとも思はれない。カフェと葡萄酒はだが身體や頭には悪くはないと見えて、夜も靜かに眠られれば讀書もかなり出来る。

讀書と云へば先月一杯は手紙を書くことと「大菩薩峠」を讀むことで殆んど潰してしまつたと云つていい。なにしろ日本にゐたのでは一寸取りつく島もなささうな浩翰の本を落ちついて讀むことが出來たのはまつたく巴里のお蔭だと云つてもいい。讀み出したらまつたく止められぬと云ふやうなものに自分は近來とんと出會はなかつたが「大菩薩峠」を手にするに及んで久しぶりに少年のやうな讀書熱を呼び起されたのはまつたく感謝の他はな



い。今頃になつてやうやく「大菩薩峠」に感服したことなどをしかもわざ／＼パリイから報告に及ぶなどは甚だ迂闊な話だが、事實は如何とも致し方がない。まったく今迄に其機會を得なかつたからだ。機縁が熟さなければいくら遇ひたいと思つてゐても遇へないと同じ理窟だ。しかし僕とても全然知らなかつたわけでもなかつた。すつと以前都新聞に連載されてゐる時分にひろい読みをした位なことはある。しかし別段都新聞をとつてゐたわけでもなかつたから續けて読みはしなかつたが恐ろしくいつまでも續いてゐる位なことは注意してゐた。けれどもこんな面白い読み物だとは夢にも知らなかつた。

パリイにゐて讀むセイかこのロマンは如何にも日本的な、さうして作者と同時代的年齢による人間にとつては特別に意味深く讀まれるやうな氣がする。關東の地方色が著しく出てるものも僕等にとつて親しみがある。こんなことをいつまでも饒舌つてゐると「大菩薩峠」の批評になるからやめるが、唯一つだけ云つて置きたいのはこの小説の根底に秘んでゐる作者の人生觀が、やはり佛教だと云ふことだけはどうしても見逃すことが出來ず、作者自身も勿論、それをほのめかしてゐるが、つまり、普通のこの種の作品と類を異にしてゐる

のはその點にあるので「八大傳」などに比べて遙に深味のあるものも要するに佛教的的人生觀が一貫して流れてゐるからだ。作中の個々の人物が常識的倫理觀によつて片付けられてゐないことがなによりも價値だ。

子供は船の中で一度通讀し、パリイへ來てからまたもう一度夜明けまで寢ずに讀み耽つてゐるのでいい加減にやめろと二三度注意した位だから、ひどく凝つてお蔭でフランス語の勉強をソツチのけにしてしまつて此の一月あまりを親子二人で棒にふつてしまつて未だに巴里見物もロクにしないのであるのはまつたく「大菩薩峠」の誘惑に起因してゐる。これによつて推斷すると東京でもこのロマンに讀み耽つた爲め入學試験にドロツプした幾多の年少子女がありはしなかつたかなどと、餘計な心配までもして見るのである。この點作者と廉價版を販賣した書肆春秋社とは充分尻を持ち込まれる責任は免れまい。

これまで旅行をしても名所舊蹟に對して甚だしくアンデイフハラン（これからチヨイチヨイフランス語を入れるからあしからず）な僕は巴里へ來ても一向見物氣分にならず、子供も同様の調子で別段歩きたがらないので自然尻が重くなつてホテルの一室に閉居してゐる



だが、先月の末にアントワーブから榛名丸のS君がバリエ見物に出かけて来たので、始めて二三日一緒に歩いた。

折悪く雨天続きで、折角の見物もダイナシになつてしまつたが、それでもルーブルとリュクサンブルグのミューゼとエツフェル塔と、エルサイユとを駆け足で見歩いた。實のところ僕にとつては甚だ有難迷惑であつたがS君でも来なければルーブルやエルサイユなどはいつ見物出来たかわからないと思ふとまあ名物を御蔭で覗いて見られたと一方S君に感謝した次第である。

天下の名畫もあ一緒くたにゴタゴタと陳列された日には一向ありがた味がなく、ウンザリしてしまふ。畫の好きな人間がゆつくりと一々あれ等の名畫を見物することになつたら全體どれ程の日敷を要することかと、考へて見たばかりでも澤山になる。僕にはかれこれと申し陳べる勇氣はとてもない、さうしてルーブルの名畫は僕の生活などとはなんの關係もないものだとつくづく思はせられた。

僕は日本にゐる時から、バリエに行つたにしても例のマロニエの花が咲いたとか、リラ

の葉が散つたとか、云ふやうなことは一切失敬しやうと考へてゐたが、同様にすべて有名な建築物とか、繪畫とか、公園とか、人物とか——つまり巴里名物に類する物はこれからもなるべくオミツトするつもりだから、左様御承知願ひたい。さう云ふことは今更僕などが改まつて紹介するまでもなく、いくらも書かれてゐる筈だから。

エルサイユの宮殿なんかと云ふものも、僕から見れば一向興味のない建物で一口に云へば「金ピカ御殿」に過ぎない。平和會議のあつた「鏡の間」とか、玉座とか、マリイアントワネットの部屋だとか、ブルジョア趣味のある人間にはありがたいかも知れないが、こんな家に住まなければならぬと云はれたら、僕などは早速閉口して逃げ出す口だ。こんな家に住んで昔得意になつてゐた人間どももゐるかと思ふと馬鹿々々しくなるばかりだ。しかし、さすがに庭園の方はなんとかケチをつけて見たいが、これはどうもなんとも仕方がない。僕等の行つた時は雨がドシヤ降りなので一向ハエなかつたが天氣のいい日にユツクリ散歩したらさぞ氣持がいいことだらうと思ふ。なにしろ一寸奥行が知れない、それに池とも河ともつかない長細い水路があつてそこでボートを浮べて遊ぶやうになつてゐるが、兩



側に樹立があつて、あたりが芝草なのだから、飯田橋あたりのお堀で漕いでゐるのは少しわけがちがふやうだ。それに一方の端からは先が見えない位に長いだから漕ぎでもあつたらう。此處の庭園はボアード・ブロンニュに次でたしかに巴里の夏のいい遊び場である。僕等の行つた時も、ドシャブリの中を觀光團らしい連中の幾組かが盛に船を浮べてゐた。庭園を歩きまわつてゐる間に、僕等に建物かなにかの説明を求めた。ひとりのエトランゼがゐるが御同様こつちも始めてでコンプラン バアの仲間だからと答へたがあまりアイソがないから、「英語は話せますか？」と尋ねると、向ふでは「エスペラントなら話せる」ときた。どうも風采から言葉のかんじからロシア人らしかつたが、お相互に通じないのでそのまま苦笑して別れたが、なる程、エスペラントもこんな時覚えておけば役に立つたのだがと、自分が兼々エスペラントに對して甚だしく不熱心なのを今更後悔すると同時に、秋田雨雀氏の同行してゐないことを甚だ遺憾に考へた。

十 三 時

モンバルナスの停車場から約四十分あまりでエルサイユに行くのだが、パリイへ来てから汽車に乗つたのがその時始めてで、先づ切符を買ふところまでつぎ、三等の切符をくれと云つたのに、二等の切符を賣つけられ、しかも乗つてから、それが二等の往復切符だと云ふことに気がつき、往きには出鱈目に發車する奴に乗つたが、乗つてから同室の學生連らしい一人が英語を話すので、やつとその汽車でエルサイユに行けるとわかり、かへりに時間がわからず、一時間半も停車場で待たされたり、まるでなつてはゐなかつた。特に停車場で使ふ言葉だと云ふが、發車時間を尋ねると、十六時だとか二十二時だとか云ふのだ、——つまり午後二時のことを十三時と云ふわけだ。マラルメの詩に「サクソニイの時は十三時を打つ」と云ふ文句があつたと記憶するが、わざと詩人がシャレて云つたものとばかり思つてゐるが、パリイではやたらにこんなことを云つてゐるのだ。しかも早口でやられるのだからメンクラわざるを得ないではないか、つまり午前と午後を判然とさせる爲めだと云ふのだが慣れない人間には迷惑至極である。



僕はこれからも自分が直接ぶつかつた失敗談を努めて報告しやうと思ふ。そんな方面のことを今迄あまり露骨に書いた人間もゐないやうだから、それにあとからやつて来る連中の爲めにも多少役に立つこともあるかも知れないから。なにしろ「赤い葡萄酒をくれ」と云つて、その「赤い葡萄酒」 Vinrouge を向ふに通じさせるだけでも、中々容易ならぬ努力を要するのだから、その他は推して知るべしだ。

巴里でも先月の初め頃からイブセンの百年祭で新聞や、雑誌が騒ぎ立ててゐるやうだし芝居もイブセン物ばかり續けてやつてゐるやうだが僕は見にも行かなかつた。日本ではたしか去年あたりイブセンの百年祭をやつたやうに記憶してゐるが、日本と西洋では年の數へ方がちがふのだと見えてこつちは一年遅れてゐるやうだ。尤も巴里では時計を昨日の零時頃から一時間進ませる規定があつたりしてこれから恐ろしく日がながくなるのだと云ふこないだ畫家のA氏から聞いた話だが、A氏が夏倫敦にゐた時、郊外で遊び暮らして、日が暮れたので、電車に乗つてかへらうとして停留所でまつてゐたら何時まで経つても電車が來ないので、どうしたことかと思つてゐたが停電にしてもあまり長過ぎると思つて、巡

査にきいたら、電車は午後十一時限りだと云はれたので、今やつと日が暮れたばかりなのにまさか十一時にはならないだらうと云ふと巡査が時計を示してこの通り十一時過ぎてるぢやないかと云つたので、始めて自分の時計を出して見ると、やはり十一時過ぎてゐたのにはさすがに驚いたと話したが、パリイでも夏は九時頃まで明るいのださうだ。

こないだ始めて「ヌーエル リテイル」と云ふ文藝學術の週間新聞を買つてみた。十二頁の大新聞で、新聞と云ふよりは雑誌に近い。評論、詩、隨筆、批評なんでもかんでもすべて一流の連中が執筆してゐるらしい。

久しぶりでメエテルリンクの寫眞に接した。彼もだいぶ年をとつたなと思はせられた。日本では近年メエテルリンクなどは生きたか死んだか分らなかつたが、こつちではなほ依然として名聲を保つてゐるらしい、ついこないだもオデオン座で「青い鳥」をやつてゐた。

メエテルリンクの詩が四ツ五ツ載つてゐたからよく讀んで面白さうだつたらこの次に紹介しやう。この大新聞の他に文藝専門の日刊紙に「コメデイヤ」だの「カンデイド」などと云ふのがある。それから「ファイガロ」なども文藝的趣味の記事が比較的多いのださうだ。



それから夕刊専門の「アントランシジャン」と云ふ新聞も文藝的な新聞ださうだ。其他雑誌は數知れずある。競馬専門の日刊新聞が三種類もあるのだから呆れる。僕はこの前にも報告した通り「デイリーメール」で間に合はしてゐるが、段々と言葉がわかり次第、新聞雑誌の方面も詳細に報告することにしやう。「レ・ヌヴェル・リテレル」は毎日朝からかかつて全部讀むのに一週間はかかるだらう。——今のところ一寸お預かりだ。

## 日本が　いいよ

### 無軌道電車

まだ僅か二ヶ月半ばかりにしかならないのに、もうそろ／＼巴里もアキ／＼して來た。勿論、其主たる原因は僕のミリオニヤアでないことに起因してゐるのかも知れないが、今となつては歐羅巴文明の粹を集めたと云はれる都會もさまで私を魅惑することが出来ないと思ふと、少からず情ない氣持がするのである。罪は恐らく僕自身にあるのであらう。僕は改まつて東西文明の優劣を論じやうなどとは思はぬが、實際どつちがいいとかわるいとか簡単に片付けられるものではないばかりか、比較するなどと云ふことからんで間違つてゐるやうな氣がする。恐らく僕は自分が巴里に生れたフランス人であつたら、頭から巴里を世界一の理想的都會のやうに考へるかも知れぬが、あいにく僕は自分が極東日本



に生れた日本人なのだからさうはゆかない。

僕は自分が西洋へ来て一番沁々と感じることは、自分達が昔立派に持つてゐた文化を途中から西洋文明の侵害によつて殆ど失つてしまつたと云ふことだ。今となつては到底とり戻すことの出来ない我々の固有の文化のことだ。それはかりではなく、現代のわれわれの不幸の原因はたいてい西洋文明の輸入に起因してゐると云つても過言ではないと思ふ。最初西洋の文明に仰天して眼の眩んだ人間を僕は今更咎め立てしやうとは思はないが、その爲めに自分達の持つてゐた優れた物を悉く失つてしまふに至つては沙汰の限りである。異人と交際して、異人の文明を輸入したことはわれわれにとつてどうしても物の間違ひだつたと云はなければならぬ。

僕はなにも高い旅費を拂つてわざ／＼西洋のアラ探しに來たわけではないばかりか、多年憧憬がれてゐた？ 巴里へやつて來ることが出來たのだから有頂天になつて喜んでゐてしめるべき筈なのだが、さううまく行かないところが世の中と云ふ奴だ。僕の「巴里通信」は恰然奥州伊達郡のお上りさんさ、御江戸の博覽會を見物に來てそれを國許へ報告してゐるや

うだと近頃ひやかして來た男があるが、願はくばさうありたいものと、僕は自分が明治初年に異國へ來なかつたことを痛切に残念がつてゐる次第だ。

東京の悪道路は世界的に有名だが、西洋へ來ると、それが一層ハツキリと思ひ出されるのはいかんとも仕方がない。新嘉坡でも道路の整然としてゐることに感心したが、さう云へば上海だつて無軌道電車が通つてゐる。電車や、自動車が行かせたかつたら先づ道路の方からやつてもらひたいものだ。僕はやうな無頓着な人間でさへ感じないではゐられない。靴が穿いて歩きたいなら、靴で歩けるやうな道から先づこしらへてかかつてもらひたいものだ。僕はパリイへ來て、なる程靴と云ふ穿き者は、かう云ふ道を歩く爲めの履物だなど日本にゐて殆ど穿いたことのない靴を珍しさにありがたがつてゐる。西洋の道は下駄ぢや危なくつて歩けない。

電車でも、乗合自動車でも停留所には必ず番號の數字の入れてある紙切れが置いてあつて待合す人間は來た順にそれを切りとつて持つてゐる。さうして番號順に乗ることになつてゐる。勿論定員を超過した場合には次の車を待たなければならぬ、かう云ふ規定だか



ら乗る客も樂だし、車掌も樂だ。電車の外側にぶら下つてゐる人間などは到底見たくも見られない。これはバリーの人口が少くないのと交通機關が發達してゐるのにもよるだらうが、こつちの人間が御相互に便利に生きることを心得てゐるからだと思ふ。なにしろ電車は少しも不愉快ぢやない、切符は切り離して、降りる時、車掌にわたす手数も入らぬ、「チンチン動きます」の代りに、こつちの車掌は「ブユウ」と圓太郎のやうな喇叭を鳴らす。

ギヤルソンヌ

巴里の町には毎日どこかしらに「フェト」がある——こつちにある日本人は「御祭り」と云つてゐるが——「御祭り」と云ふのは安當ぢやない——まづ縁日のやうなものだ。夜店と云ふもののない巴里の町では民衆の夜のウサ晴らしとしては「フェト」のある場所でもウロついて見る他に仕方もあるまい。

しかし、その「フェト」たるや、まつたくもつて單調なものだ。安價な賭博本能を目的

とした露店でなければ、メリイゴーラウンドの形を多少變化させたものに過ぎない。射的、玉コロがし、ルウレットを廻して砂糖の箱をとるとか、棒の先に繩をぶらさけて、その先に輪がついた奴で、地面に竝べてある葡萄酒や、ブランの瓶をつるとかまづそんな風な似たりよつたりのアテ物ばかりだ。あとは駄菓子屋が出てゐる位なもので、同種類の店が何軒となくならんではゐるだけだ。日本の縁日の方が遙かに變化もあり、趣味もある。金魚屋や植木屋を考へただけでもまるでかんじがちがふ。

巴里ではたいいていの店は正午から一時まで休む。夜は七時にしまふのが定規になつてゐる。夜遅くまでやつてゐるのはカフェだけだ。パンは定食だが米のやうに買い置きは出来ないから、みんな毎日買ひに出る。パンの長い奴をむき出して抱へてみんな町の中を歩いてゐるのは物珍らし光景だ。中には道で食ひながら歩いてゐる女も随分とある。若い娘などもみんな平氣で、菓子や果物などを食ながら歩いてゐる。尤も東京のやうにホコリが立たないから、別段きたなくはならないが、日本では僕等なら平氣だが、若い娘などがそんなことをして歩いたらすぐ目立つにきまつてゐる。



洋装をして断髪にしてさへるればモダンガールなら、こつちの娘たちはみんなモダンガールだと云ふわけになる。しかし、多分アメリカから流行して来たのだらうが、断髪でなくつて、男同様に髪を真中からわけたのが澤山ある。頭や顔を見ただけぢや、男だか女だか一寸區別がつかない、腰から下を見て始めて女だと気がつく。こんなのがこつちのウルトラモダンなのだらう。「ギャルソング」と云ふ小説もある位で、流行の本源はニウヨークにちがひない。昔パリイは西洋の流行の源泉だったが、今はニウヨークへ場所換をしたわけだ。カフェも一番繁盛してゐるのはメリケン式でケバケバしてゐる。それを純粹のバリジアンが慨歎してゐる。慨歎したつて始まらないことはわかりきつてゐる。どこかの國でもすべて新しいと云ふことは西洋臭いこと、西洋と云ふのはアメリカと云ふこと、思想はドイツの猶太人に壓倒され、生活の様式はヤンキイに征伏されてゐる形だ。こつちの婆さんにはヒゲを生やしてゐるのがかなり多い。別段趣味でもあるまいが、剃るのがめんどうだといふにしてはヒゲがあんまり立派すぎる。どうもかの女等の了見がわからない、日本の婆さんのオハグロをつけてゐるのを見て異人に合點がゆかぬのと同じ理窟なのだらう。

さうですかね

巴里の出版界には勿論圓本など云ふ物はないから、それに類似のバカデカイ書物の廣告が見當らないばかりか、文藝専門の新聞以外には本の廣告と云ふものはあまり見當らない。それから活動寫眞の廣告や、音樂會、寄席、芝居の廣告も極めて小さい、全體に廣告がジミだ。廣告の盛んなのによつて、出版界の景況を論ずることになれば、日本の東京は巴里よりも遙かに盛大だと云はなければならぬ。月初めにフオブルグ街のベルンハイムと云ふ畫商の家で開かれてゐるマネの展覽會を見に行つた。點數も少しいし、纏まつてゐるから落ちついて見られたせいか、僕は巴里に来て始めて畫を見たやうな気がした。

マネは僕の好きな例の George Moore の友達でもあり、ムアを通じて度々彼に接してゐる



せいか、かなり親しみを持つて見ることが出来た。僕のやうな素人にも彼の技巧的確さと男性的な覇氣の漲つてゐることがわかる。近頃、ルーブルに入つたマラルメの肖像などは八號位の小品だが、若し僕に書齋でもあつたら、當分かけて置いてもわるくはないと思はれた。シガアを持つてゐる右手などのあたりが殊によく描けてゐるやうに想はれた。D'Almeida と題する若い土耳其婦人の畫なども非常にデリカに描かれてゐて、僕の興味を唆つたマネエやうなノルマルの畫でさへ、昔は異端として、パリイ人を瞠若たらしめたかと思ふとまことに今昔の感に耐へない。

シヤリヤピンが三年ぶりでパリイへ来て Salle Pleyel と云ふところでこないだ獨唱會をやつたが、懷都合がわるかつたので、聴きに行かれないかつたのはなんとなく残念なやうな氣がしてゐる。

無理に行かうと思へば行けないこともなかつたのかも知れないが、音樂會や、芝居へ出かけるには多少の「氣分」が必要だ。パリイくんだりへ来て、懷中を氣にしながらシヤリヤピンでもあるまいと考へてやめにしたわけだ。例の「ヴォルガの船唄」を始めとして、シ

ユウマン、ルビンツユタインの舊いところからリムスキイ・コルサコフ、ムソルグスキイ、ダルゴミスキイなどと云ふ比較的新しいところを唄つて喝采を博したらしい。伴奏のマクス・ラビノイツと云ふ男も後で、スクリヤピンや、ボローデインなどの小曲を弾いたとことだ。シヤリヤピンの聲量は三年前に比べて寧ろ優れてゐる位だとの評だが、一度も聴いたこともない僕には「さうですかね」と云ふより仕様がなない。シヤリヤピンのパリイ演奏を日本の諸君に放送する代りに、聴かれなかつた吹聴をするのもまた一興かも知れぬ。いづれにしても音樂の批評と云ふものはとかく雲を掴むやうなものだから。

日本を出發する際、「フリオフレニトとその弟子達」の譯者河村雅氏から、譯本と手紙とをパリイにゐる原著者——即ちイリヤ・エレンブルグに届けることを言づかつて來たのだが、エレンブルグの入りびたつてゐると云ふカフェーの名を忘れてしまつたのと、來てから一ヶ月と云ふものは旅疲れやら、不知案内やら、手紙書きに忙殺されて、まつたく忘れてゐるのだが、稍落ちつきも出來て、「ロトンダ」と云ふカフェの名も思ひ出し、それがモンパルナスにあることは「フリオフレニト」の開卷第一章に書かれてゐることに氣づき、林の



ところへ来る青年畫家O君がよくモンバルナスのカフェに出かけると云ふので、O君にエレンブルグの搜索方を依頼し、やつと二ヶ月がかりで、O君の友人のK君が彼を知つてゐるとのこと、期日を約してモンバルナスのカフェで遂にエレンブルグに會見することが出来、やつと河村氏との約を果した。しかしそのカフェは「ロンドンダ」ではなく「ロンドンダ」と小説中で呼ばれてゐる「ロンドン」の筋向ふの角にある Dome と云ふ家であつた。

### ドームとエレンブルグ

此處でエレンブルグは毎日午前の九時から十二時まで原稿を書くことを日課にしてゐるのだ。テーブルもきまつてゐるらしく、なんのことはない「ドーム」は彼のアトリエであり、事務所でもあるのだ。午前の三時間、彼はカフェの一隅で見向きもせず、バイプを喫へながら、一心不亂に書いてゐるとのことだ。勿論、友達が來ても十二時までは無言の行を續けてゐるらしい。

一見彼は三十七八歳のきはめて温厚な紳士である。風采も普通で藝術家によくある異常な容子などは少しも見えない、始めてのせいでもあるだらうが、口數も少く静かな態度でバイプをくわえてゐる。彼の著書に「十三本のバイプ」と云ふ題名がある位で、彼はよほどタバコが好きらしい。僅か三十分ばかりで碌々話も出来なかつたが、日本で彼の書物が三冊も譯されてゐることをきいて喜んでゐたらしい。出版は主として獨逸でやつてゐるらしく、二三日中に出版の用事で伯林にゆかなければならないから、歸つて來たらまたゆつくり話すと云つてわかれた。巴里では最近やうやく一冊翻譯されたが、英米ではまだ一冊も翻譯されてゐないと云つてゐた。パリの今の廿歳前後の青年は四十歳前後の人間よりも概して舊いと云つてゐた。僕がフランス語を饒舌らふ、彼が英語を饒舌らないので、K君の通譯を煩はしたが、此次に會ふ時にはいづれゆつくり彼の最近の思想的傾向や、その他の問題に就て訊ねるつもりである。日本で一向消息のわからなかつたアルツイバアセフは二年程前にポーランドのワルシャウで逝去したことを、僕は始めて彼によつて知ることが出来た。



パリイに来て日本の古い文化を愛惜しジョウヂ・ムウアやマネに改めて好意を表し、シヤリヤピンを聴かないことを残念がつてるたりしては、僕も自分ながら、つくづく古い人間であることが感じられる。年齢と云ふものは争はれないものだ。しかし、實際のところ自分はまだ凡ゆる文藝に興味を失つてしまつてゐるのかも知れぬ。春夫の註文の「青春を一ダース」もかうなると甚だ怪しいものだ。

## 子供のゐない巴里

按摩上下二百文

こんど引越したところはモンスリイ公園に更に近く、一三丁離れた電車通りを越すと、市外になる——つまり場末だ。しかし場末と云つても高臺で、近所は極めて閑靜だ。有名な日本の畫伯藤田氏もついでこの近くに住んでゐるとのことだ。僕等のゐる部屋は四階の東向きで前の水道貯水池の青々とした芝生を通じて遙かにバリー市街の一角を見渡せる甚だ眺望絶佳な部屋だ。ホテルの效能書きにもわざわざ「Vue Magifique」とある。エツフェル塔は見えないがノートルダム屋根がほんの少しばかり見える。晴れた日には遠くの岳陵が薄霞んで眺められる。東向きなので早くから朝日が射して僕等のやうな寢坊には甚だ都合がいい、御蔭で眼が早く醒める。



前のホテルよりも安く、部屋で自炊が出来るので、一日に一度は米の飯をアルコールラ  
ンプで焚いて食べてゐる。親子二人のエトランゼエが巴里の場末の薄汚ないホテルの一室  
で貧しい日本の飯を焚いて食つてゐる情景は甚だもつてありがたくない。しかし春未だ寒  
い薄曇つた日の夕暮に、静かな町を見下して、食後のタバコを吹かしながら遠く離れた故  
郷の人々を偲ぶのも中々味があるではないか。

此處のビュファアロオと云ふホテルはボオニエ街一番地でもあるが又、トンプイソアール  
街の一三八番地でもある。つまり二つの街の三角形の頂點にあるので番地が二つになつて  
ゐる。僕等の部屋は兩番地を兼有してゐるわけだ。トンプイソアールと云ふのは、近所に  
イソアールと云ふ墓地があるからで、こつちの人達がトンプイソアールと云ふ名前を呼ぶ  
のをきくと、どうしても「トンドレスワロオ」とか「トンビスワロオ」とかきこえるので甚  
だ可笑しいかんじがする。

この邊は場末のせい、朝早くから色々な物賣りが通る——寝ながらそれ等の呼び聲を  
をきいてゐるのも甚だ興味がある——勿論、なにを賣つてゐるのかわからない。その中で

も一番私の耳につくのは中婆あさんの聲で、どうきいても「按摩上下二百文」ときこえる  
のである。その節廻しがまつたく同じなのだから驚く。あまり氣になるので、或る朝私は  
寢床から起きあがり、あわてて窓を開いて見たら、人相のあまりよろしくない婆さんが乳母  
車のやうなものを押しながら折々上を見上げて呼び歩いてゐるのだ。車の中の品物は上か  
ら風呂敷のやうなものがかぶせてあるので、その内容は知るべくもない。彼女の姿を眼の  
あたり見て彼女の呼び聲をきいても、やはり私の耳にはどうしても「アンマカミシモニヒ  
ヤクモン」としかきこえないのだ。

巴里へ来てからなによりも先づ氣のついたことは子供の少いことだ。それに赤ん坊の泣  
き聲がめつたにきかれないことだ。場末の町を歩いて窓にオシメをぶらさけてゐるやう  
な光景は殆ど見られない。僕はナポリに上陸した時、偶、貧民窟のやうな裏町を歩いたが  
其處では至るところに薄汚ない洗濯物が方々の窓からぶら下つて子供の泣き聲や女の罵り  
わめいてゐる聲などがきこえて貧乏町は何處も同じだと思はせられた。しかし、パリイで  
はよほどひどいところへ行かないと、一寸そんな光景に接することは出来さうもない。



巴里のセムシ

シネマを度々見物する程の人間にとつては西洋の男女がやたらに抱擁したり、接吻するのは今更別段奇でも珍でもないが僕がパリイへ来てから眼に付くのはやはりその珍でも奇でもない姿態だ。夕暮の街を歩けば若い男女が、殆ど至るところの隅々に停留して、あたり憚らずに喋々喃々してゐることだ。若し日本でこんなことを路傍でやつてゐたら、早速通行人の揶揄嘲弄の的になり、氣の早い彌次連からは石の一ツも投げつけられることになるのだらうが、さすがに巴里ではそれがなんの事もなく通行人も傍を通つても振り向いて見るものさへないのだ、時には白晝でも人通りの少い街などではお構ひなしにやつてゐる連中がある。傍を通るこつちの方が氣が引ける位である。尤も小學校の生徒でも男女の學生が別れる時、御相互に接吻して別れてゆくのだから、習慣で不思議はないやうなものだが如何に勇敢な日本のモダアン青年子女もまだ銀座街頭で、その真似をする者はあるまい。

どうせ異人にかぶれるなら、だが其處まで行かなければウソだと思ふ。誰か一つ試みにやつて見るモダアンはないかね。

パリイの人間にあまりノツボのゐないことはこの前にも一寸報告した筈だが、その反對にセムシの多いこともたしかに注目しに價する。僕はこれまで外出して殆どセムシを見ないことは一度もなかつたと記憶する。それに片手や、片脚の人間は勿論ザラにある。これは一見歐洲大戦の犠牲者であることを想像するにたたくはないが、セムシの方はまさか大戦の影響とは云へまい。それから象皮病患者もかなり眼につくやうである。少いのはヨツバライである。

ヨツバライが少いと云ふのは必ずしも酒飲みが少ないと云ふことではない。否、酒を飲むと云ふ點から云へばこつちの人間の方が數にしたら多いかも知れない。どんな貧乏人の家庭でも、葡萄酒を飲まない家はあるまいから、それに子供や女までみんな飲むのだから——尤も葡萄酒は酒ではないなどと云ひだせば別だが、さうなるとビールを酒ではないと云ふやうなことになる。



つまり酒の性質と飲み方がちがふからだと思ふ。こつちの人間は酒の爲めに酒を味ふのではなく、アツベルチーフなどと稱して、食前に食欲を刺戟する爲めに一杯か二杯飲むのが普通になつてゐる。それから食後にはコニヤックとかジンとか強い酒を飲むらしいがそれは極少數の人間に限られてゐるらしい。だから、到底日本の酒のやうな情趣はない、従つて甚だ無事だと云ふことになる。なにしろ西洋の酒の呑み方はいづれにしても無風流きはまる。

往來で葬列に會すると、男は必ず脱帽し、女は十字を切る——これなどは見てゐて、如何にも奥床しい感じがする——日本では葬式に會ふとエンギを擔ぐが、こつちでは見えず知らずの死者に對して一同が敬意を表する——習慣だから別段なんでもないと思へば云へるが、こんなのはわるくない習慣だと思ふ。死者の身内にとつても往來の他人が脱帽して敬意を表するのを見てゐる氣持のする筈はない。路傍でやたらにベイゼをやるのは考へものだが、こんな風な習慣は眞似をしたからといつて少しも恥にはならないと思ふ——一寸氣づいたから參考までに報告する。柄にないことを云ふと笑はないでくれ給へ。

### うるさいブルポアール

こつちにある日本人はみんな佛蘭西人がケチだケチだと口を揃へて云つてゐるやうだがまつたくさう云へばケチクサイやうでもある。物のネダンでもいやに細かく刻んでつけて置く。五フランと云ふところを四フラン九十五サンチムとつけて置く。物のネダンでハンの勘定のついてないところはない。さうして十文でも安いところが繁盛してゐる。一體に佛蘭西人は數理的觀念が發達してゐるらしい。従つて打算的になる、云ひかへればケチとなる。僕のやうな十圓で一度買物をするのと後のツリ錢が忽ちわからなくなるやうな人種は云ふことに例外だが、數理的觀念が發達すれば、物事がキチヨメンになり、ケチになるのは自然の道理だと思ふ。キャフェーの女給にチップをやたらに奮發して得意になるやうなのは無邪氣でいいが、キャフェーのいいことをミエにするのもあまり譽めたことではあるまい。キャフェと云へばフランス、わけてもパリイは世界での本場だが日本のカフェとはまつ



たく存在理由を異にしてゐる。日本ではカフェと云へば美しい女給がゐて、酒を呑んで彼女等に戯れ、歌でも唄つて騒ぐところと云ふことにきまつてゐる。歌のうたへない奴は議論をしたり、ケンカをやる。とにかく、カフェーは男のウサ晴らしの場所で、女子供の行くところではない。

しかし、パリのカフェエはまつたくそれとは別物で、老若男女が必ず日に一度位は入つてカフェエを一杯、ビールを一杯傾けて、悠々と新聞や、雑誌を讀んだり、人と合つて談話をするところだ。それから手紙を書くところだ。カフェエにはたいていレターペーパーと封筒が備へてあつて、ケチなフランス人は手紙をカフェエで書くにきまつてゐるらしい。中には原稿を書いてゐる奴もある。さうでなければ、ランデブウの場所利用する。カフェエは午前中から人が出入するが、晝のカフェエは實に静かなものだ。夜は多少場所によつてにぎやかではあるが、酔ばらつて歌を唄ふ人間はひとりもゐない。少し氣の利いたカフェエには専屬の樂師がゐて奏樂をする。馴染の客がゐるて自分の好きな曲を注文して弾かせたりする。場末の小さいカフェエなどでさへ勞働者が入つてゐても、トランプを闘はして

ゐる位なもので、まつたく火の消えたやうに静かだ。人間が文明になるとみんな活氣がなくなるのだらう。

ウルサイのはブルボアルと云ふ奴だ。一割ときまつてはゐるが、カフェエのギヤルソンを始めとして、シヨツファ、郵便配達、門番、店の賣子、芝居や寄席の便所の番人に至るまで一々ブルボアルだ。だから、パリで一步外に出れば必ず小錢を用意しないと、歩かれないと云ふことになる。金は僅だが慣れない者にとつてはまつたくウルサイ。うつかり忘れれば平氣で催促をする。それもイクラならイクラと云つてくれればいいが、いい加減なのだから、小錢のない時はミス／＼面倒なのでやらなくてもいい金をやると云ふことになる。尤も場合によつてブルボアルを適用すれば随分と便宜なことがあるらしいがなにしろ小面倒な習慣だといはなければならぬ。

今月になつてやうやく春めいて來たが、夜はまだ時々冷えることがある。例のマロニエとリラが今を盛りと咲いてゐる。公園はどこも満員だ。眼鏡を掛けた婆さんがミユツセやバンビルの詩集などを樹蔭で繙いてゐる圖はまづ日本では當分見られさうもない。文學の



話は追々とやることにする。

### 無想庵との邂逅

さて、巴里もやつと初夏らしくなり始めた。五月の半過ぎまでは冬の外套をきてゐるさへ寒い時が毎日のやうに續いたのには閉口した。おまけにスチームは最早部屋の中に通つてゐないのだから、夜などは恐ろしく冷て幾度か眼を醒ました。それに雨の日もかなり多かつた。もつともこんなことは毎年の常例ではなく、巴里も今年是不順なのだとのことである。

今月に入つてからやつと麗らかな天氣が續いて外出するにも張合が出て来た。巴里の町の方角も大體わかり、メトロ（地下鐵）の乗り換もまごつかずにどうやら出来るやうになつた。毎日の買物や炊事は大方コドモがやつてくれるので助かる。甚だ無事單調な日を送つてゐるわけである。書物とタバコさへあれば自分はまづ満足してくらしてゐられるのである。しかし勿論いつまでもこんな風な状態を續けてゐられるわけもなく、續けたくも



ない。

なんの爲めに巴里へ来たのか？！と云はれても自分にはそれに對してハツキリした返答は出来ない。まづ簡単に「見物」と云ふより他に仕方がない。しかし「見物」にも色々な程度がある。各人の趣好や、懐都合によつて自らそれが異つてくるのはきまりきつた話である。エツフェル塔や、凱旋門や、ノートルダムや、ルーブルなどは二重橋や、日比谷公園や、泉岳寺や、三越と同程度のもので、至極安全第一で、此程度なら懐の問題も自らなくなるわけで、後はタクシイに乗るか、電車に乗るか、メトロで行くかと云ふ位な差である。こんな風な見物だけなら、日本にゐて、寫真帖でも眺めてゐる方が遙かに氣が利いてゐるかも知れぬ。さて、これ以上の見物をやらうと云ふことになる、さすがに巴里は世界の遊園地だけあつて殆どその底が知れない位だと云つてもいいかも知れぬ。勿論自分はまだその入口さへ覗いては見ないが、仄聞するところによれば到底公にその内容を新聞などで報告することの不可能なもののあることだけはたしかである。どうせ人間のやつてゐることだから、別段神祕不可思議でもあるまいが、日本の東京ではいくら金を出し

ても、そんな種類の見物のできないことだけは保證できる。

半月程前に、武林無想庵がクロードキヤヌからひとりで飄然としてやつて来た。震災前に二の宮で會つたきりで、ザット六年越しで會つたわけだ。會つたからと云つて特別に話のあるわけでもなく、それにバリエへ来てから度々手紙の往復をやつてゐたので、改まつて御相互に尋ねることもなかつたが、兎に角字義通り「友あり遠方より來たる」の感は孰れにしても深かつた。無想庵もかなり苦勞はしたにちがひないが、案外フケてもゐず、元氣も左程衰へてゐない様子なので、私も一寸安心した。彼から見たら僕の方が餘程消心してゐたに相異なる。

彼はリュウ・モンマルトルのオテル・ド・サヴォアと云ふ家に假りの宿をとつてゐた。此處はモンマルトルと云つても所謂バリエの「淺草」と云はれる例のモンマルトルではない。ボアソニエールと云ふ東京で云へば元の日本橋の魚河岸のやうな大市場の近くで、至極ゴタ／＼した通りで、サヴォアの階下はバア兼食堂で市場へ買ひ出しに來る連中相手の極め



て安價な酒場なのである。僕が尋ねた時にはそのカミサンなのであらう。三十二三歳の肥つた潑刺としたゲームが一杯機嫌かなにかで、無想庵の部屋を教へてくれた。

三階の薄暗い、晝でも電氣がほしいやうな穴藏然とした部屋に彼は泰然として、入口に面した方に机を置き、しきりとペンを動かしてゐた。その日は天氣も悪くなかつたので私は彼に散歩をすすめてやがてそこを出た。

散歩と云つても何處と云ふあてもないのでブラ／＼と足の向く方に歩き出したが、そのうち、無想庵はペールラシエーズへお墓詣りでもするか——と云ひ出した。ペールラシエーズが何處なのだか僕はもとより知らなかつたが、其處にはオスカア・ワイルドの墓のあること位は小耳にはさんではゐた。

無想庵とバリーで落ち合つてワイルドの墓詣りをしやうなどとは夢にも考へてはゐなかつたが、それがまたなんとなくあたりまへのことのやうにも思へたのであつた。

墓地の周囲には高い土塀がめぐらされて、蔦が一杯それに這はせてある。入口は方々にあるのだが、正面の立派な鐵門のあるところから這入る。爪先上りに石磴をのほつてゆくと

突當りにはバアトロメの有名な、死者に捧げられた群像がある。そこへ行くまでに左側にはロシニやミュッセの墓があり、右側には天文學者アラゴの墓などがある。なにしろ此處の墓地は舊くもあり、バリー第一の、由緒の深い墓地なので、有名な人間の墳墓が澤山ある。僕等は別段墓場を見物に來たのではなく、公園よりは靜かで、落ちついて散歩も出来るのでワイルドをダシに使つてやつて來たまででフランスの歴史的人物の墓を見たからとて格別感慨無量であるわけはない。道のきれいなのと樹木の澤山あるのがなにより氣持がいい。墓石も色々な種類があつて、立派なのが多い。僕などにはそれがなんと云ふ種類の石だかわからないが、いづれ大理石の親類にはちがひなからう。恐ろしく光澤のある黒色や、褐色の金目にしてもかなりのものだと思はれるのが無數に並んでゐる。僕は東京の北郊染井にある親父の墓のことを思ひ出して、僕がヨーロッパ見物に來る金でオヤヂの墓をたててやつたら随分功德を施すことになるわけだがと、馬鹿氣た空想をしながら腹の中で苦笑した。——人間の folly はまつたくスウが知れない——と無想庵はひとりごとのやうに云つた。



ペールラシエーズの墓地の案内記は今迄色々な人間によつて書かれてゐることと思ふ。多分日本でも誰かがキツト書いてゐるに相異なる。

ワイルドの墓は少くともボオドレエルのよりは氣が利いてゐると思つた。アツシリヤ風の人間だか天使だか、動物だかわけのわからぬシンボルが彫刻されて、裏面には彼の略歴と、この墓石が生前彼の詩文を敬愛してゐた某貴婦人によつて建てられたものであると云ふやうなことが記されてゐる。

僕等はその傍の草原の日あたりのいいところに横になつて、一時間程ねころがつてゐた。

——ワイルドの死んだホテルはまだ確か今でもある筈だ。

——美術學校通りといへばさうたいして場末ぢやないね、僕はまたもつとひどい木賃宿のやうなところで息をひきとつたことだとばかり考へてゐた。

——木賃宿は木賃宿だらう。

如何にもさう云へば僕の今ゐるホテルだつて木賃宿と云へば云へるわけだ。屋根代だけ拂つて、飯は食はせないのだから。頼めばコーヒーにパン位は持つて来てくれないこともないかも知れないが、誰れもそんなことをやつてゐる人間はひとりもゐなさうだ。一步外へ出れば、スグと前にも、隣にもカフェがあるのだから。

無想像も今のところでは日本へ歸る氣はないらしい。しかし日本へ原稿を送つて生活することの甚だ不安なことは泌々と感じてゐるので、このままフランスの土となる覺悟なら自らその方針を定めなければならぬが、さうなるとパリイと云ふところは一向ダメなところだ。渡船のムツシユを羨望したのもあながち戯談ではなく、そのムツシユの職業にしろ、セエヌ河の古本屋にしろ、メトロの切符切りにしろ、みんなそれぞれ株があつて、エトランゼエには勿論そんな仕事は與へられはしないのだ。

パリイは世界の遊園地で、外國人から金を巻あけることばかり考へてゐるのだ。パリイへ来るなら「御金を持つてゐらつしやい」と期せずしてパリイ人の顔が囁いてゐる。腹の中では恐ろしく輕蔑して嫌つてはゐるらしいが金をまき散らす點ではメリケンの觀光客



が一番の上得意なのだから、かれ等の歡心を買ふやうな仕掛が盛り場へ行くと特に目立つのもやむを得ない現象である。

若くて、金があつて遊ぶことに浮身をやつしてゐる人間はよろしくバリイへやつて來ることだ——

## 西洋から歸へつて

自分は西洋へ出かける前も、目的なしに旅をして歩いてゐた。しかし、勿論無意識的にはなにかしらイリユウジョンを抱いてゐたに相異なる。生きてゐる間、人はなん等かのイリユウジョンなしに生きることは不可能である。人生は云はば希望と幻滅の連続である。

若し巴里が朝鮮や、滿洲位な距離にあつたとしたら、巴里に對するわれ／＼のイリユウジョンはどれ程割引されるか知れない。船で四十日あまりも揺られてゆくところに値打があるのだ。少くとも初めて西洋へ行くなら船へ乗つてゆくに限る。

故郷を離れて遠く知らぬ異國へ旅立つと云ふこと——そのことだけでも云ひ知れぬ感慨が湧き起るのである。

自分は僅か一年たらずで舞戻つて來た——別段の理由もない、豫定の金がなくなり、これ以上ムリをして半年や一年ヨーロッパにゐたところで、たいしたこともないと考へたの



でかへつて来たまでである。

折角、文藝特置員にしてもらつたのだが、碌にまとまつた通信も書けず——讀者諸君に對しても甚だ面目次第もない。しかし、他にも近頃は澤山歐洲へ向けて出かけられた諸君があるから、それ等の諸君からいづれ遙かに面白い通信があることだと思ふ。

コドモは始めのうちはどうしてもかへるのがイヤだと云つてゐたので、最初の約束通りパリイへ残して来るつもりでゐたが——イヤ僕がかへると云ひだしたら、やつぱり一緒にかへりたがり始めた。それに考へて見ると、からだもあまり健康の方ではないし、託すべき適當な家も半年や一年では一寸見當らず——僕がかへつてから——急にノスタルヂヤを起してかへりたがりつたりしたので困ると思つたので連れてかへつて来た。

最近十年あまりと云ふもの、僕はコドモと一緒にくらす機會が極めて少かつた——と云ふより、僕はこんど初めて巴里でコドモと一緒に生活して見た。僕よりコドモの方がよほど色々な事を知つてゐて、世話を焼いてくれたのはありがたかつたが、僕にとつては少からず迷惑なかんじを受けた。

一年あまり外國生活をしたことが、コドモにとつていいかわるいかは後になつて見なければわからない。しかし、少くともコドモは西洋が別段日本にくらべてすぐれてゐないことを沁々かんじたい。否、寧ろ内心ではかなりヨーロッパ人を輕蔑してゐるらしい傾向さへ見える。これはあながちオヤヂにかぶれてゐるせいでもあるまい。

僕は屢々人からもコスモポリタンだと云はれ、自分でもひそかにそれを得意にさへしてゐたのだが、一度日本を離れて西洋の土を踏んだら、自分があまりにも日本人であるのに驚いてしまつた。

僕は偏狹なリアクシヨネールにならうと云ふのではないが、西洋が西洋としてすぐれてゐる點と、われ／＼がわれ／＼としてすぐれてゐる點とが如何にその質に於て相異してゐるか云ふことをはつきり感じさせられたのである。皮相な西洋文明の模倣がわれ／＼にとつて如何に滑稽であり、無意味であるかと云ふことを自分は痛切にかんじさせられたのである。



自分が西洋へ出かけた最大收穫は自分が日本人であると云ふハッキリした自覺と、自分の生れた郷土が如何に美しいかといふことを今更ながら覺り得たことである。勿論、それは人によるので、僕の場合だけの話だが、他の人達が西洋へ出かけて、如何に西洋に感嘆し、心酔してかへらうとも、僕だけは断じて西洋には頭を下けないつもりだ。考へて見ると、自分がこれまでひそかに敬意を拂つて來た西洋の偉人達はみな西洋の科學的精神に反抗してゐる人達ばかりだ。

西洋流の尺度から押せば、われ／＼はまだ半開人かも知れぬが、僕等の尺度でかれ等を見れば、かれ等こそよほど野蠻である。僕はなんにしる異人に感服することは出来ない。恐らくこれは僕の年齢の問題であるかも知れないが、僕にモダンボーイになれと云つたところで、それは無理な註文である。

日本が西洋の文明をとり入れてそれをドシ／＼利用することはまことに結構なことかも知れないが西洋をありがたがつて、われわれ固有のすぐれた文物を忘却するに至つては言語道斷である。

日本が日本として墮落したのは西洋と交際して、異人にかぶれすぎた結果である。科學など云ふものはなくても昔の日本人は立派に生活して來たのだ。

文學だつて、昔の支那の文學は西洋の文學に比べて遙かに高級だと思ふ。僕は少年の時英語なんぞ習はず、漢文を一生懸命にやつて置けばよかつたと、今更後悔してゐる。

僕は滔々として流れてゐる時代の潮流に強て反抗しようとするわけではないし、またしたところで到底追付くわけのものでもあるまいが、僕は僕としての實感をありのままに表現するだけのことだ。自分は時代に取り残されることなど少しも恐れてはゐない。

僕は昔から岩野泡鳴が好きで、彼の影響はかなり受けたが、實際彼は日本近代の最大思想家であり、文學者であると、歸來改めて彼のことを考へてゐる。泡鳴氏と云ふとなにか人物にコツケイ味が伴ふが、まつたく彼のやうな眞摯な態度で文學の爲に努力した人は少いやうに思ふ。僕はもう一度、彼をよく讀みなほして見たいと考へてゐる。

それから、日本の現在の文壇？ に露伴と鏡花が存在してゐることは實に日本文學の爲めに慶賀すべき事である。世界を見渡しても、かれ等に比敵する文學者はひとりもゐない





と云つても過言ではない。

「文學」と云ふものはどんなものかを知りたかつたら先づ露伴と鏡花を読むがいい。なにもわざ／＼骨を折つて外國の作物など讀む必要はない。

洋行して愈々頭が變テコになつたなどと思つてもらひたくない。僕は依然としてダダイストである。

## 歸朝漫談

巴里滞在、ちやうど一年間、本紙(讀賣)へ巴里通信を數回書いたけれど、何しろ子供を伴つて行つたので何も書けなかつた。僕は子供の隨行をしたやうなものだ。向ふに居ても僕より子供の方が毎日街へ出て、自轉車で所々方々を乗り廻してゐたから、子供の方が僕より巴里通になつたらしい。

僕の居た街には、街頭にガス燈が灯つてゐたが、子供の時分僕が淺草の藏前にゐた頃、藏前の通りは柳の並樹にガス燈が灯つてゐた。その頃のことを思ひ出したりしておそろしく古い感じがした。

◇  
巴里と云ふところは、一體に電氣を非常に儉約するところで、私の居た部屋などもやつと十五六燭の電氣で、暗くて困つた。



僕は、向ふでも着物は常に着て居た。持つて行つた古い道行きも着たが、下駄だけは持つてたが歩かなかつた。歩きたくもすべつて歩けないのだ。酒も餘り飲まなかつたが、葡萄酒と云へば、赤の葡萄酒のことを日本語流に云へば、バンルージュと云ふのだが、これでは、とても通じない。パンオウージュと云はないとわからないのだ。兎に角、一流の店舗へ行けば英語の話せる奴もあるが、少し場末だつたりしたら、英語は話さないし、とても話を通じない。煙草は一番安い、二フラン二五のエレガントの「ブルー」ばかり喫つてゐた。一箱のことをバツケと云ふが、或る時、場末で二箱呉れと云ふと、二本出すのだ。向ふでは殊に場末などでは二箱一度に買ふ例もないし、それに人の服装を見て一本賣りをするのだ。二本出された時は一寸驚いた。

◆  
キャフエーは非常に多く且つ便利である。コーヒ若しくはビールを一杯飲んでいつまでもゆつくりして行くのだ。そして切手や煙草をも賣つてゐるのだ。そして封筒は自由にキャフエーで使はして呉れる。だから、のんきな連中は何時間でも此處に居て用を足して行くのだ。活動寫眞館は畫興行をしてゐるところもあるが、夜の八時九時から十一時頃までやつてゐるところが多い。十二時過ぎから一晩中ダンス場が盛んになる。モンマルトルなどは大抵さうである。

◆  
モンバルナスにはキャフエーが何軒もあるが、ドーム、クーボール、ロトンド、セレクト等へよく出掛けた。セレクトではいろ／＼の詩人に會つたが、ルイ・アラゴンと云ふ英語をよく話す青年詩人や、トリスタンツアラなどと云ふ詩人に會つた。ダダ派の後派の詩人でシユールリアリストだ。アラゴンが英語をよく話すので、いろ／＼のことが解つた。彼は教會で物を盗んで新聞記事にされた譯だが、その記事を、自分の「文章論」の中に入れて、近代ジャーナリズムの模範文だと云つてとほけてゐるあたりは愉快である。

◆  
武林無想庵君とは最初から會ひ度いと思つて居たのだが、マルセーユの領事に住所を聞いても解らず、巴里に行けば解るだらうと云つたが、はからずその住所を青山義雄君に依つ



て知つた。

僕は巴里に着いた日、グランブルール（こつちで云へば銀座みたいな所）を林倭衛君と歩いてゐると、そして林君が青山なら知つてると話してゐる時、向ふから當の青山君が来て知り得たのである。無想庵君は勉強してゐる。當分こつちへは歸るまいが、酒は止めて非常に健康になつてゐる。林君は今年三月頃歸ると云つてた。

僕はシベリアを経て歸つて來たのだが途中十數日三等でゆられて來た。未だ疲れてゐるが酒を止めて丈夫になつた。汽車中、京城で正月を迎へたが一緒に歸つた村松君とビール三本を飲んだきり、こんな正月は生れて初めてであつた。歸つて、雑煮を食つたが、今年のぞうにの味は格別である。（談）

## 巴里コンニヤク問答

武林無想庵  
辻 潤

潤

（彼は今、Café Neant?の一隅にゐる。）

なにかから始めてもいい。問答は始めからしないのだ。それを有るやうに形象するのがわれわれの義務だ。義務とは？ 旭日が東天から昇り始めるやうなものだ。鳥が塙に歸へるやうなものだ。君は今何處にゐるのか？

昨夜、無爲が戸を叩いた。しかし、私は彼に遇ふ必要を認めなかつたので黙つてゐた。



彼は三度戸を叩いた、さうして歸つて行つた。彼は私に用事のあるわけではないのだ。

今朝、彼から手紙が来た。「今朝は失禮しました。あなたはまだおやすみになつてゐるのですか？ この次の日曜に伺ひます。」たつたこれだけだ。彼は私に用事のあるわけがないのだ。

それで、君はこれから僕になにを訊ねやうとするのだ。

女は牝牛と共に必需品であるか否か？ 參政権はかの女等に赤兒より必要であるか否かと云ふやうなことをか？ 若しくは、ソビエツト政府の國制を調査することは帝國主義の基礎を一層堅牢にする基であると、一法理學者の最近に述べた説に就て、君が今すばらしい四行詩を案じてゐることを私に知らせたい爲めに、獾の舌の滋味に就て、僕の「日月の背理とその運行」と題する論文の例の第二章中にある、人類は獾の子孫であると云ふ私の最近の發見は、頗ぶる獨創的でないまでも、アミイバと稱する一種の猿類より進化したと稱する愚論より聊さか根據があることは、先づ獾の舌の解剖を讀まれたら、たしかにその一端を覗ふことが出来るであらう」と云ふ文章に對する君の抗議を新らしく持ち込む爲め

であるか？ 先づそれ等の點から明らかにして欲しいと思ふ。

五月だといふのにみぞれが降つてゐる。またしても單調なギターの音がきこえる。君は今何處にゐるのだ？

なにしろ君が巴里に來たことは君がこの家のギャルソンに託した紙片によつて知ることが出來た。御相互に顔を突き合すよりも寧ろしばらくわれわれの義務をこの一隅の卓子に託す方がいいかも知れぬ。では、君から始めてもらひたい。

無

その通りだ。旭日が東天から昇り始めるやうに僕は巴里へ來た。さうして鳥が塹に歸るやうにネアンへ寄つた。が、あんまり朝早かつたので、例のギャルソンのギイがただ一人テーブルの上へ椅子を逆さまにのつけて、まじめくさつた顔をしながら、しきりと掃除してゐた。



僕が今何處にゐるといふのか？ 今度はもう「どこだるまのえんのした」はやめた。さうして巴里で一番豊富に食物のあるところにあることにした。それは僕が今すつかり腹をへらして了つてゐるからだ。さうしてただくそれがためにのみ巴里へ出かけて来る氣になつたからだ。

で、ギイに君の安否を一寸たづねたのは、つまり寒山が巖から降りて来て、拾得の竹筒に残飯がたまつてゐるかどうかをたづねた故事に従つたものだ。ところが君の方は同じ故事に従ふにしても、シヤラツクさいプラトン以來の傳統に従はうと云ふのだ。

もちろんそれに對して反對はしないサ。今世界の思想界で一番エライ本としてしきりと推奨されてゐるユーバリノスが、やつぱりその手でソクラテスをかつぎ出して來てゐる位だからネ。

そこで問題は云ふまでもなく女だ。ソヴェットだ。さうして帝國主義だ。同時に猿の舌だ。併し君の著書に對しては今更抗議なんぞ持込む氣は毛頭ないから、その點は安心してもらひたい。

人類の猿の子孫に屬することは君に依つて夙に承知してゐるが、ただしそれはどうも男性だけにかぎるやうだ。さうして女性はやつぱりアミーバ進化説の方が當つてゐるやうに思ふがどうだらう？、

無爲に逢つたら、よろしく。

やすいビエモン米があつたから今朝三キロほど買つて來た。

### 潤

傳統の瓦斯燈の如く舊くさいことは僕も先刻承知してゐるのだが、われわれがよりによつて瓦斯燈のついてゐる巴里の場末に陣取つてゐる以上、それはまた是非のないことかも知れぬ。しかし、君の抗議も別段なささうなので僕も一寸安心した形だ。あれをまた君に改めて辯明することになると、少なくともプラトンやソクラテスのやうな教科書位では間に合はず近頃アルゼリヤの附近にある古墳から發掘された。・Palaeologos と云ふ厄介至極



の典籍を數百頁に亙つて引照しないと僕としては氣がすまないことになるし、あいにくソイツがまた僕の手許にあるわけはなく、君も知つてゐるあの考古學のミイラみたいなピエルエルゴの爺に會ひにソルボンヌまで御百度を踏まない一寸埒が明きさうもないから、それを考へただけでウンザリする。

それはさうとまだ君は米などを食つてゐるのかい？ もつとも腹がへつてゐる時は一番安くつて先祖傳來食ひなれた水穂の實が最後にわれわれを救つてくれることになるのは、傳統や瓦斯燈どころではなく、行燈や、蠟燭と共にありがたいことは、ソビエツトのチャンピオンも未だ多分御存知はあるまい。しかし、なにしても君がピエモン米を發見して食つてゐることを聞いて二度安心した。實はおれの方の竹筒もあまり豊富でなく、折角君が久しぶりで出て来てくれたのだから、まさかいつもの竹筒だけやあまり藝がなさずると内々心配してゐたわけだ。なにしろ御互に腹だけは膨らして置かないと、これから長々とやらかすわれわれの義務にも莫大な影響があるからね。

ピエモンと云へば日本の名優ハネ左衛門と云ふ男が今日「ロンシヤン」へ現はれたと、

夕刊「巴里スポール」が報じてゐるが、巴里へわざ／＼競馬をやりに来るやうな身分も一寸わるくないな。天地はもとより一馬だが、アイツが今日モトリコに張つたとすれば、ガニヤンで百萬フランはさらつて行つた筈だ。ピエモン米とオレゴン米とは一キロに對して二十五サンチームがたちがふなどと云ふやうなことに頭を痛めてゐる「一馬」とは同じ「馬」でも「馬」がちがふ。どうもいたしがたがないがね。

時に「ユーバリノス」に對する君の高説を少々伺ひたいものだね？ 實は僕は初耳なのだよ。あまり長く會はないので、なにかから訊ねていいか一寸見當がつかない。

無

きのふネアンを出ると、驟雨沛然サ。はたちすぎればただの人であつたり、而して塵柄が立つたりした時代には、むしろ進んで萬弩の如き銀箭の矢面に大手を振つて濶歩するところを喜んだものだが、年だネ。ニツツアのリュ・ド・ラ・ポストで濫々二十フランはづんだ



玉蟲色のカスケットが色でも褪せたら天下國家の一大事と考へるやうになつて、隣のツワビヤンの前で立すくんだと思ひたまへ。すると篠つく雨を透してオスカアワイルドの墓へ金泥で埃及人物を踊らしたやうな建物のファサードが見えるぢやないか。ハテ、ブルワール裏のかかる熱鬧地帯にこんなツータンカアメンはなかつた筈だがと不思議に思つて、雨の小やみを幸に、フラ〜と抛物線的にシヨツセエを横ぎつて、その前まで行つて見ると、ナアんだ、それが珍しくもないフォリイ・ベルジエールさ。二三年御無沙汰してゐるうちに奴さんたんまりと暖まつて、爰もとペール・ラシエーズよろしくといふ新装ぶりだ。

と、例によつて、かの時流を競ふたる風采ばかり堂々と而も頗る大まじめに助平な顔をした連中が、三四本ある入口の柱へ鈴なりにとツついて、何やらジツと凝視しつつ、それぞれに垂涎三尺のたんのうぶりだ。中には女と肩を交はしたまま、ピッタリ接觸した頬などをすらし合つて、思はずヌラめく唇と唇とをチュウとやつてる氣の早いあひてもある。云ふまでもなく、それ等セゼツツヨンの柱には、すべて背後にホンノリと電燈の光をかくして、實物以上に飽くまで人の好奇心をそそらずんばやまざる底に装置した、かの登場

裸體美人の百媚百態をば、巧にくもりガラスの表面へもつて行つて、恰も潑刺生動させつたあつたものだ。

さすがは巴里だよ。昔はナポリを見て死ねと云つたが、今は巴里を見て死ねサ。恐らく君の所謂ハネ左衛門とやらいふ迷優も、その覺悟でロンシャンへ一馬をばりに來たものなんだらう。眞言亡國、禪天魔。さうして馬の魔羅に念佛か。さうして無間の鐘がめて金十萬圓也がきいてあきれれる。

さう〜、ユーバリノスの消息を君はたづねてゐたつけね。奴は今アカデミー・フランセーズに納まつてゐるよ。君にして初耳とは思議だが、既に巴里に來てゐる以上は大枚十ニフランで埒があく。僕の高説を待つまでもないだらう。併し………

潤

併し………とおいでなすつたね。「ユーバリノス」の講釋が面倒臭いので、「併し………」か、し



かし、だがね、その問題は「十二フラン」と云ふ奴だよ。グラチユイで君の高説を聴聞するのと自腹を切るのでは腹の蟲の磁石が自づから方向を轉換するからね。

一杯三フランの「フイヌ」なら四杯、一フラン五十文の奴なら八杯——とすぐと「蟲」のいい計算を始めやがる……「北冥」の水を割つて呑めば一生酔拂つてゐられますぜなどと、飛んでもない煽動をやらかすからね、中々「ユーバリノス」まで手が届きかねるよ。

實はおれはさつき眼を醒まして以來、しきりに頭の中で「人生は玉コログアシ」と云ふ文句を繰り返してゐるのだ。繰り返してゐると云ふよりは、ソイツが玉コログアシのやうにひとりで勝手に頭の中を轉けまはつてゐるのだから、少なからずウルサイよ。

君が沛然たる驟雨によつて、銀箭の如く、舊態依然たる「フォロイ・ベルジュール」に逃げこんで、玉蟲色を愛惜したことは些さか同情に價するが、こつちはアイニクと「ムーラン、ルウジユ」なのだから。まるで見當がちがふ。

兎に角、僕は蚤のやうに汗臭い男女の人波の中を跳ねまはつてゐたのだ。舞臺の上では雜然たる騒音と色彩とが入り亂れてゐるだけで、なにがなにやらサツパリ要領を得ない。

すると、遽かに落雷のやうな音がして舞臺も客席も一面に暗黒になつたのだ、わづか一瞬間ばかりのうちにはバツとまた明るくなつたと思ふと、例のミスタンゲットの婆の顔が舞臺一面にひろがつて、まるで舞臺中が、顔だと云つてもいい位なのだ。勿論見物席からは期せずして拍手の一齊射撃だ。婆は眼を白黒させて眞赤な口を一杯に開けて「オホホホ」と口に似合はぬ愛嬌笑ひをしてみせたものだ。と、耳と首の下から小さい手足が現はれて踊り始めた。それはいいが、舞踊の音楽がふるつてゐる。可笑しな音楽だと思ひながら聞いてゐると、なんのこつた、それは僕の子供の時から聞きなれてゐる「九連環」ぢやないか、ところで、舞臺の踊りに合せて観客席の一同が「カンカンノオ・キュウノレス」と云ふ合唱をやり出したには驚いた。

呆氣にとられて見て見ると、やがて婆の大きな顔が消えて、眞白な笠のやうなものが現はれた。よく見ると笠ではなくて婆さんの尻なのだ。すると、共處へ眞赤なツラをして金の環を頭へ填めた奴が現はれて、なにかわからぬ口上を述べてゐるが、やがて耳から細長い棒を取り出して、婆あゝの尻の穴へ錐をもみこむやうにその棒をもみこんだ。見物席から



はまたもや轟然と拍手が鳴り響いた。

尻の穴からは見るまに紫の雲のやうなものが吹き出して来て、その棒が次第にふとく延びとう／＼舞臺の天井を突きぬけ始めた。アレヨアレヨと見てゐるうちに、おれの眼の前には一向珍らしくもないエツフェル塔が突立つて、シトロオエンの廣告が、赤くなつたり青くなつたりしてゐるばかりで、「ムーラン・ルージュ」も見物もミスタンゲツトも孫悟空もいつの間にか姿を消してしまつてゐるのだ。

此處までが「人生は玉コロガシ」の導引だが、これだけぢや誰れにも勿論合點のゆく筈はない。見てゐるうちに「シトロオエン」の廣告が、いつの間にか「ジンセイハタマコロガシ」に早變りをしてゐたのだ。

眼が醒めてからも僕の頭に「ジンセイハタマコロガシ」がこびりついて離れない。これからペール・ラシセーズのアベラールの比翼塚へでも參詣して、一つ夢判斷でも伺つて來やうと思つてゐるが、いやに今日は身體がグツタリして、まるで、自分が朝から玉コロガシでもやつてゐるやうで、まつたく變調子だ。テーブルの上に可笑な落書をして行つた奴が

ある。

in the evening of madness, nude and clear, space between things has the shape of my words—

無

九連環はたのもしい。とんだところでヌタルジイとお出でなすつたものだ。いづれにしても時代なものサ。尤もツウチエ・ムツソリニイの國ぢや、ここもと「チン・チュン・チャオ」といふ奴が、どこの寄席でも大流行ださうだ。

「王ころがしの」夢を見るわけサ。そのミスタンゲツトでさへ Paris qui tourne だからネ。グルグル廻つてゐりやア、それで市が榮えるんだ。ベルグソンにはじまつて、ミスタンゲツトにをはるか……エツフェル塔にはじまつて。シトロオエンにをはるか……デカルトにはじまつてブルーストにをはるか……ボードレールにはじまつて、アンドレ・ブルトンにをはるか……まア、どうでもいいやうにしてもらはうよ。いづれにしても「人生は玉ころがし」



の雰圍氣を出ないところがお手拍子御喝采サ。

プロバビリテといふ奴だネ。なまじつか數學なンぞに文王をきめやがるものだから、ザマア見ろだ。プロメテエぢやないが、柄にもない火なんどといふ大それたものをクスねやがつたむくるは靦面サ。未來永劫コオカサスの素天邊で、丙丁童子以來劫火でウン／＼唸つてござる。何としてもいい氣味だ。プロレタリアよ、結束せよ、か。フン、鐵鎖でネ。

Prome theus unbound がきいて呆れらア。厄落しなら。さしづめスベヂア灣へサラリサラリといふところだらうよ。

時に無爲はどうしたネ? こないだの日曜にはやつて来たかい? けふギイにきくと、奴はこの頃女ができたさうぢやないか。察するところその女といふのは、きつとあの希臘の踊子アテイクテに相違ない。とんだ久米の仙人だ。無爲にして化すとは昔から云つたもだが、女性によらなければ化せないところが妙サ。Idiot だよ。ミスタンゲットのアニウスへもつて行つて、齊天大聖ともあらうものが、さういふ怪しからんことをやつたのも、要するに、フロイドだ無爲にして化すのも當然だ。その夢判斷にしてからが、鳥邊山のア

ベラールだからなア。

ギイは又曰く、問題の建築家ユーバリノスが、問題のコリントの少女と、ゆうべ遅くなつてからネアンへ来たさうだ。さうして夜が明けるまで、フェドルの噂でもちきつてゐたさうだ。二千年以上たつてもまだ浮ばれないところが西洋人だね。フランチェスカとバオロのノロケがなま／＼しいのも無理はない。

例の洞穴へ歸つたら、混沌から手紙が來てゐた。あけて見たら白紙さ、アブリダシかと思つて、ピエモン米をアルコオルランプへかける時、あぶつて見る拍子に、メラ／＼と焼いて了つた。混沌の手紙だから別段惜しくはないが、いづれ又儻と忽との仲裁について手こづつた愚痴が書いてあつたらうとは思ふが。

潤

なんにしても「玉コロガシ」は願ひ下げにしたものだ。御蔭で昨夜からスツカリ熱を出



して、今日はまだギイのツラも一度も拜まず、御手料理の鹽粥を啜つて孤峰頂上のベツトにねそべつてゐる。結局、かうしてゐられる間が僕等の「Paradis artificial」だ、敢へて出身の道のないわけぢやないが、一步外に出れば「人生日々是口實」だからね。

今日は珍らしい上天氣の上に、ペンテコステとかヘンテコ祭とか云ふ御祭りなのださうだが、佛蘭西の奴はなんにしても色々な口實をこしらへてよく遊ぶことを心懸けてゐるのにはまつたく感服茶釜だ。リキドのバアセンテージの過多なことだけはたしかに首肯されるね。ベルグソンなどと云ふ助平哲學の講釋師が出現するのもまつたく無理からんよ。朝ッぱらから樂隊の「エランギタル」などは鹽粥を啜つてゐる人間には少なからず小癩の種だ。

無爲はあれから一度も來ないよ。どうりでね、奴さんもうく／＼洗禮を受けたわけかね？　しかし、その希臘の踊りツ子と云ふ女のツラも一寸拜みたい好奇心もないことはないが、どうも彼奴は苦手だよ。彼奴と一度會ふと、僕はどうしても一週間や、十日は必ず棒にふつてしまはなけりやならないのだ。

「ヤア——」と云つて這入つて來るかと思ふとすぐ僕の部屋は朦々とタバコの煙りに包まれてしまふ。二時間でも三時間でも無言の業を續けてタバコを吹かしてゐる。別段用事のあるわけぢやないが、なんとか少しは纏まつた話でも偶にはすればいいぢやないか。彼奴ときたら、コッチでいくら話しかけても「アン」とか「ウン」とか云ふきりで、サツパリ饒舌らないのだからね、それでゐて、彼奴のゐる間は僕もいつの間にかエレガントを三箱も四箱も空にして、「時間」の經つのを忘れてしまふのだから、まつたく妙だ。

だが、事實女が出來たとすれば、彼奴もそのうちなんとか眼鼻がついて人間並になるだらう。さうすればコッチも大助かりだがね。しかしそのアテイクトとかなんとか云ふ女をつけて押しかけて來られるのも一寸考へものだよ。實は君が出來たのを幸ひ、僕は彼奴が來たら當分君の「穴藏」の方へ追拂つてやらうと多少考案してゐたところだ。

混沌が半紙を持つて來たかね？　まさか半死半生と云ふシヤレでもあるまいが、いづれにしても、われわれが義務を盡してゐる間は、無爲や混沌の輩は鬼門だよ。あんな手あひにひつかかつてゐたら最後、鹽粥にも見放されることになるからね、なにしろ御互にまだ



千歳世を厭ふにしては色氣タツブリだからね……巴里くんだりまで来てヘラズ口を叩かうと云ふのだから、少しは脈があるよ。無爲に機先を制せられて、指をくわへてひつこんでゐるにしてはアクがありすぎる。無爲の奴、今頃は化して「茫」としてゐるやがるだらう。落花流水ただ茫々か……

無

けふは不思議と君の樂書が残つてゐないと思つたら、病氣か？いつになく佛頂面でギイがキヤフエと一緒に持つて來た君の手紙でわかつた。僕はまた君の近頃の義務呼ばはりを中心ひそかに柄にもないと思つてゐた矢先だから、手紙を見ない前は、やつぱり木に竹はつがれないものなどと、例の早呑込をきめたものだが、まんざらさうでもなかつたので、祝していいかどうかは疑問に屬するが、とにかく安心だけはした。病氣ときいて安心は聊か目安にあわぬやうだけれど、その安心たるや、たとへ遠羅天釜のそれほどの大問題では

ないにしても、少くとも煮るべきワレ／＼の鹽粥にかかつてゐることだけは事實だ。

例の大死一番といふ奴にお目にブラさがつて、さてほの／＼と白々明に通りすぎるミルク女を呼びとめたのは、云ふまでもなく菩提樹下の悉達だが、ワレ／＼日本人にはどうしてもミルクぢや收まらない。そこで鹽粥サ。それもボロ／＼した南京西貢のぢやいけななきまつてゐる。ピエモンだつて、カロリンだつて、恐らくテキサスだつて、實はまだ本物ぢやない。やつぱり肥後とか江州とか來なくてはピタリとゆかない。さうしてかく死に近づけば近づくほど、いよ／＼ますます／＼舌の先の選擇が尖鋭になるところに味がある。

インタアナシヨナルリズムの急所だネ。エスペランドぢや詩は書けない。戦争なら飛行機や潛行艇でもできるが、いざ九死一生といふわれ／＼日本人の舌の先は、何が何でも鹽粥を要求する。

ところで思ひ出すが、僕のぢぢいが死ぬ前にネ。その中氣で口のきけない病人の枕元へ叔父叔母どもがよつてたかつて、一生の親不孝をば最後の瞬間にとりかへすつもりか、「いろは」を書きならべた伺ひ板をば、すでに朦朧としはじめたぢぢいの眼の前へつきつけ



たものだ。するとぢぢいはブルブルふるふる骨ばかりの指先で、まづ「う」とついた。片唾をのんでみんなが凝視してると、恰も君の所謂玉コロガシの玉がまさに轉がりやをさめようとする前の、あのユウラリ、ユウラリ、微動した指先が、やがてピタリと「な」の上でとまつた。あとは云はずと知れた「ぎ」サ。それを見ると、叔母どもは聲を放つて泣いた。ぢぢいは江戸つ子だったので、きつと大好物の大黒屋の中串をば今はのきはに舌鼓うちたかつたものであらう。ところは函館サ。函館にロクな鰻屋のある筈はない。さうして四十年以上函館に住みつづけながら、最期の味覚は遙に遠く大黒屋の家の棟にとどまつたところが、叔父叔母じやないが、嬉しいやら悲しいやらではないか。

ラフオスタンのアナスタジユスがユーリビデスのお禮にヒメトスの蜂蜜を懇望したのも同一轍さ。

まアせいぐ静養したまへ。

無

愛する妻子のところから、是が非でも一度かへれと云つて來た。無爲の突然の事件と云ひ、かたぐ洞穴の南京蟲に避易して、今晚汽車へのつて南へかへるよ。併し手紙は依然としてネアンのギイ氣付にして送ることにするから、決して義務を打切る考へではない。人生は口實だよ。さうして義務は打切つても口實は打切れないところが娑婆國土だからネ。但し僕の妻子のあるところは娑婆國土のうちぢやない。須彌山説に従へば、刀利天に屬してゐる。だから禪定によらなくなつて、誰でも三百六フランはづめば行けるところだ。

では、さようなら。アデュウ……

潤



アルハ鹽粥オメガ鰻。 Alles oder Nichts—はエゴマニヤックイブセンの發明販賣にかかる

ことは三歳の幼童も先刻御存知とは限らぬ。禪定は必ずしも方丈に限つたこともなからう。玉座でも羽根蒲團でも、波斯製のデイヴンでもいづれは胡坐して大平樂の第次四元に遊離しさへすればもつて瞑すべきで、素寒貧パレオロガスで徒に尻を腐らせるのが能でないことはエピクロスの夙に喝破したところさね。

時に君は「南京洞」に惜しくもない別れを告げて刀利天へ舞戻りかね？ 桃梨花開けども

胡蝶舞はず、ネアン夜更けて客足絶え、ギイの奴が涎れをたらして居眠りをしてるやがる赤い鼻の頭から蒸気が立ち昇つてゐるのは多分陽氣のセイだらう。僕の熱は少しばかり下つたやうだ。

函館に鰻がないやうに巴里には筍子がない。アスベルジュがいくら安からうが、アーチシヨウがいくら乙力だらうが、決して筍子の代用にはならん、僕は日本で筍子を食べたたびに支那の哲人孟宗氏を偲んで、夙に彼の竹林學苑に學ばなかつたことを甚だ遺憾としたものだ。しかし彼の「學んで忘れざるは君子の恥づるところ」と云ふ格言だけは常に眷々服膺してゐるつもりだ。

刀利天には未だに薔薇がボタノと落ちて薫香を四海に放散してゐるかね？ 僕にも妻

子らしいものがあるやうだが、愛すると云ふ「言葉」はどうも當らない。符牒も時々改良を要するね。内容を伴はない「言葉」をいつまでも人間が使用してゐるから、色々なまちがひが娑婆に多くなつて、大便法とか小便法とか、ヨケイナムダ口を叩いて暇潰しをすることになるのさ。尤も小便をやたらにヒリ散らかして、錢になると云ふのだから、一度味を占めたら忘れられないのも無理はない。アリストテレスの小便は五色だとか、ヘイゲルのは泡が多いとか、マルクスのは搾取價値があり過ぎるとか、一々分析して秤りにかけて一リツトルいくらで賣り出すのもまつたく當世さ。

尤もわれわれのやうに一杯六十サンチームの珈琲に舌鼓を打ちながら、日本人會の鰻井と、出雲屋のママシの優劣を論じてゐることになれば、ネアン即バラデイオソさ、大黒屋だの恵比壽屋だなどと云ふのは場異ひでテント問題にならんよ。セエヌ河の鰻のシラ焼を食ひながら、ジャンコクトオでも論じなけりや、中々もつて小便法には對抗出來んね。



そろ／＼雀が鳴き始めた。巴里の黎明もまたわるくないよ。僕はこれから一寸ビュットシオモンの丘でも一まはりして、ランデブウの名残を懐かしんでやらうと思つてゐる。

無

百花ふかきところ一僧かへる、カネ……僧はよかつたよ。僧なんて字が元來無意味なんだからネ……サンギヤブランニヤさ。僧伽阿蘭若の首だけでもぎとつて、いきなり單敷にして遠慮なく列御冠なみに取扱つて、さうして澄まして刀利天へ點景してゐるところが、どうしても、アリアンではない立派な證據だらうぢやないか？ 君のすきな、それ、何とか云つた……例のベンジヤミンフランクリンの夫子論者の紐育ゴロさ……あの男の云ひ草ぢやないが、震旦はホアンテイの大昔から依然としてアナルシイばかりつづけて來た大陸にちがひないよ。だから一僧サ。個人主義者サ。エゴイストさ。ニヒリストさ。従つて「愛する」といふ内容のもつて行きどころのない、空虚な言葉そのものと格闘するトドのツマリ

となるわけだ。さうして改良主義のいつでも不徹底なのは結局その一點にかかつてゐる。

ただそれ「言葉」なんだ。矢でも鐵砲でもないのだ。たとへ石油くさいセーヌのシラヤキにせよ、又タカラノヤマのカン詰にせよ、そいつをシトロローエンの招待に應じて、エツフェル塔の結婚式へ持出したにたところ、目的は大小便になるんだから、要するに百姓さ、百姓は由來ガリ／＼亡者だよ。

そこでレーニンが手古擦つたといふ、トロツキイがトルキスタン落をきめたといふ、ベアトリチエなしのパラテイオンぢやア、あきれかへりのダンテだつて、さすがに不服はとなへるにきまつてゐるよ。さうしてガリ／＼亡者に幅をきかされて、それですこぶるインタアナシヨナルがつてゐるところは、URSSも明治大正昭和とそっくりそのままの圖ぢやアないか。

百花ふかきところへ一僧のかへつたのは、何も巴里の毒瓦斯を發散させるためではなかつたのだが、實はどこをどうさがしても肝腎の釋提桓圖の姿が見えないので、それでツイ業をにやして了つた始末サ。いくら花ばかりフンダンに咲いてゐても、青空ばかり澄みき



つてゐても、本尊が姿をかくしてゐるやうぢやア一向たのもしくない。

だから愛妻愛子——いけなければ荆妻豚兒か、(それぢやア尙逆戻りだ)——をそのかして四五日うちには再び巴里へ舞戻る。で、南京洞は一旦みかぎつたものだから、それに親子三人の同行ぢやア、一寸收容しかねるだらうから、今度は河岸をかへて……と、そこまでは、まア、わかつてゐるが、あとは明晩の前講さ。水簾洞にはまだニセ悟空の奴が大きなツラをしてのさばつてゐるだらうなア?

ギイと云へば、奴の戸籍が偶然ニースの町はづれでわかつたよ。あいつの本當のおふくろは、やつぱり露西亞貴族だつたんだ。今は町の名にまでなつてゐる例のバシユキイルツエフさ、あの女のところへ、あいつのおやぢが一度フラ〜ツとたづねて行つたことがあつた。カンヌで發狂するすこし前の話だ。さうして若しバシユキイルツエフがたしかに自分の種子を宿したといふことを知つたら、あいつのおやぢだつて、恐らく發狂なんぞせずすんだかもわからない。尤も發狂の方で果してさう便々だらりと馬鹿な顔して十月も待つてゐられたかどうか疑問だがね。とにかくギイへいいおみやげができたわけだ。

### 潤

南京洞から刀利天? 刀利天から自他樂天か? 孰れにしても蘭若の眞空にいつまでも納まりかへつてゐられないところが、情けないと云へば云へるが、是非もない次第さ。

ニセ悟空はどうやらまだ大きなツラをして納まりかへつてゐるらしいね——どうせいつまで長持ちのするきづかいもあるまいから、勝手に威張らして置くことさ。いづれ水簾洞も近い内賣り物に出ることだらうが、今に三文でも買ひ手がなくなるだらうよ。せい〜くエルサイユ並に二法の入場料でもとつて物好きの奴のフトコロをアテにする香具師の手に落ちる位が關の山さ、さうなればまつたく呵々山だ。

昨夜は月がよかつたのでフラ〜と出かけてセエヌの河べりを一時間あまり歩いて、ボ—ザールの橋の上でしばらくボンヤリと河の流れを覗いてゐたら、「ムツシユ」と呼びかける奴がある。見るとボロ〜の薄汚ない髯ゾラの爺が紙片を差し出すから、例の「私は



「啞」を賣り物にして辻占を押しつける乞食のたぐひにちがひないと、僕はまづ「ノンメルシイ」と突つばねると、爺は「ムツシユ」とまた繰返してその封筒のやうな紙片を鼻の先きへ出すのだ。折柄の月の光りに照らされたその紙片をフイと覗くと僕の眼に「Romance sans Parols」と云ふ文字が入つて來た。僕は「オヤ」と思つて、その爺の顔と紙片とを見較べてゐるうち、どうも彼の顔が決して始めての顔でないことがわかつて來た。

—おぢさん、どうも君の顔には見覚えがあるが——と云ふと、

—巴里へ來て、おれの顔を知らないやうな奴はよつほどの間拔かモグリダー——キサマは案外話せる奴だと思つたが、やつぱり唐變木か——と云ひながら、紙片をポケットにねぢこんで、彼はスタ／＼と歩き出した。

この時私の頭には電光のやうに「ポールエルレイヌ」の二字が浮んだが、もうその時は遅かつた——「アロウ」と云つて追ひかけたが、彼の姿は最早どこにも見えなかつた。

セエヌの河には夜霧がたちこめて、月がひとり靜かに照つてゐるばかり、僕は狐に憑まれたやうな氣持で、ネアンに歸つて來た。

だが、考へて見るとエルレイヌが今頃、巴里をうろついてゐるわけもなく、やつぱり唯の乞食爺に過ぎなかつたのかも知れぬが、それにしても「Romance sans Parols」といふ字だけにはたしかにハッキリと頭に残つてゐるので。エルレイヌは死ぬ前に自分の子供をキャフエのギャルソンにしなかつたことを非常に残念がつてゐたと云ふ話だがさうしてその子供は今でも時計の職工かなにかして、巴里の貧乏町の片隅に残存してゐるとか云ふことだが、まさかそれを苦にして浮ばれない亡者が時々ウロ／＼と出てくるわけでもあるまい。

ギイの戸籍調査、近頃御苦勞——人間の宿命と云ふ奴はまつたく風の吹きまはし見たいなもので、その風のまに／＼飛び散る病葉に自分を比べたのはさすがに大詩人さ。

晩春の夜風が身に泌みて、今夜はいやにさんちまんたるだ、君も早く衛星をつれて歡樂の自他樂天に出現して來たまへ。



その衛星を引卒して、とう／＼またやつて来た。近代科學は林檎や藥罐の蓋をダシにつかつて、結果の印象を原因の純粹知識といふ實は本來空な形式へあてはめやうと死物狂ひになつたトドのツマリは、太陽系なんて變なものを確信せざるを得なくなつて了つたのが運のつきサ、併し須彌山の構造を繪にかいたのを見ると、ツクネ芋のやうなもの左右へもつて行つて、日天子と月天子とをシムメトリカルに宙返りさしてゐる。その點へ行くと頭のいい評判の印度人も案外智慧のないところを曝露してゐるわけだ。衛星の話をするつもりだつたのだが、須彌山と近代科學とが等分に下らなくなつたのでやめる。

ゴクウルの遺産の上で、乙ウとりすましながら、やつぱり事實はチャールストンを踏んでゐるにすぎないフランス現代の一家の言をきくと、近頃フランスの出版界では無暗に文豪評傳ばやりださうだが、とう／＼種がつきて、それがルムベン文士の末にまで及んで来たといふ。さうして君がゆふべセーヌの河畔で見たエルレーヌやジャリヌイを筆頭に、ジェルマン・ムウヴオ、アドルフレッテ、ガストン・ルルウなどと數へ立ててゐる。

大詩人とか大文豪とか、本屋にとつては、そのどちらも大したものには相違ないが、飯

を食つて生きなければならぬ人間にとつては、しかも賣る得べき一物をもたぬ人間にとつては、さうしてセーヌの河畔でローマン・サン・パロールを通行人の鼻先へつきつける勇氣すら持合はさぬ人間にとつては、一體全體どうすればいいのだ？ さうしてどうにもならぬことは生まれぬ先からわかつてゐるのだ。

ゆうべブルブル・モンマルトルで、月並のテラッスへ月並のならび大名をきめこんでゐると、バラトスから流れ出るラツケル・メーレル式色電氣を爪先から浴びせかけられながら、プスやオトの疾走するトロトアペリで、街路樹の下のとあるベンチの上へ、ながくとねそべつてゐる一個のルムベンが、はからずも視線の中へとび込んで来た。

レージョン・ドノオルの略章を小襟へ點じた日本人が、同様にそれと心づく、「世の中にはああいふノンキな人もゐるんですなア。」と云つたものだ。

ノンキ！……主觀的にはそれこそサンチャタールの極ぢやないか？ フル／＼嫌ひぬいたミユセエより、しきりに純客觀かつたフロオベルの方が、今日から考へて見れば、嫌はれた當人よりは、そのサンチャマンタリズムぶりを、遙に凌駕してと思ふがどうだネ！



ジャン・ジャクの子供が大學生であつたり、モオバツサンの子供が、ギャルソンであつたり、さうしてエルレーヌの子供が循環小數のやうに再び時計屋であつたりすることが、風のままに飛び散る病葉の一つ々であるとするれば、もつてサンチマンタールになる……来て見ると、やつぱり第六天にかざるよ、すくなくともルネアンの別製キャフェに舌鼓うてるだけが拾ひ物だ。小さい方の衛星がジャンダルクといふ學校へ通ひはじめた。

潤

第六天と云へば淺草の代地を思ひ出し、須彌山と云へば三世相を懐かしむのも時代なもののさ、明治の二十年代に淺草代地の第六天の社内にある秋葉様の大天狗と小天狗にひどく凝つてゐた少年が、不惑を過ぎて巴里に流れこんで、ネアンの屋根裏で「獺の舌」に現を技かしてゐるなどは、どう考へて見てもミラキュラスで、三世相の圖説も敢へて不思議とするに足りんさ。だが、日天童子が逆立をしたり、東勝神洲に石猿が生誕したり、ソレイユが

一本足の金鳥だつたり、イグドラツシルの根下に鱧が巢を食つてゐたりしてゐた時代の方がズツと非衛生的で、人間がメリキを呑んだり、ラヂオをしやぶつたりしてゐる現代よりは遙かに生甲斐があつたに相違ない。御相互に混沌帝の御宇に生れ合はさなかつたことが罰當りみたいなので、今更賤の芋巻を繰り返へしても追つつくわけのものに非ずさ、と云つてルンペン文豪の傳記をもつて、「商談俱樂部」とか「クエン」などと云ふ極東の大雜誌の御最負に預かるにはあまりに頭がノーマクサンマンダーだ、「阿呆は寝て待て」と云ふソロモン大王の箴言を三誦しても、ゴンクールとやらの遺産はどこからも舞ひこんで來さうもないね。仕方なしに親譲りのレーゾンデエトルをぶら下けて歩いてゐるが、コイツは鉦一文の融通もきかず、「おばさん」も相手にしてはくれないよ。さんちまんたるの一説としてミュッセよりもフローベルの方がなどと近頃ひどく改つた質問は君らしくもないね——いくら小衛星がエコールジャンヌダルクに通ひ始めたにしろ好々爺ぶりがチト激し過ぎるよ。御説を待つまでもなく、そりや勿論フローベルの方が元祖で家元さ——「レジユカシオ



ンサンチマンタル」と云ふ名薬を賣り出してゐるのでもわかつてゐるぢやないか？ ミュ  
ツセももつと早くからあの薬を服用してゐたら、彼のヒステリーもあんなにひどくならず  
にすんだにちがひないよ。

人は見かけによらぬものとはよく云つたものでつまりフローベルなどといふ親爺はその  
標本みたいなものさね、こないだもサンゼルマン通りのシユタインバツハの前を通つたら  
麗々とフローベルの肖像が出てゐたからなにかフローベルがその料理屋に關係でもある  
のかと傍へよつて見たら——なんのこつた——フローベルがその家の名物シヤトウブリ  
ヤンの廣告のダシに使はれてゐるのさ——伯林だつたらさしずめビスマークと云ふところ  
さね。一生自分のサンチマンタル過多性に呻き苦しんだ結果、今では誰れもふりむいてさ  
へ見ないデイスイリユウジョンの金字塔を築きあげたのはさすがにエライがまつたく他所  
目にも御苦勞千萬と申し上げるより仕方がない。揚句の果がビフテキの廣告さ。

昨夜無爲がひよくりネアンへ現はれたよ。僕も久しぶりで彼の顔を見たので一寸嬉し  
いやうな氣がしたが、あまり歡迎してまた毎日押しかけられては耐らないから、いい加減

にあしらつて置いたが、例のアテイクテとも別れたらしいよ、それとなく泥を吐かせてや  
らうかと思つたが、奴さんイヤ／＼して一向要領を得ない返事ばかりしてゐたよ。

歸へりがけに「此處へナアジャと云ふ子はやつて來ませんか？」と訊いたから、僕は  
勿論知らんから知らんと云つて置いたが、なんだか、變に氣になつてならんよ。

無

ナアジャ？……何だかき覺えのあるやうな名前でもある……かうツと、ジャアラシチ  
ヤンドラチャバラはクリジスの戀の先生だつた——。バアチャは遠州掛川在のバトワだ  
し、カチユーシヤはアイシヤの妹だし、ヤブカラコウジはブラコウジの兄貴だし、ムシヤ  
コウジは日本の文豪だ——……さア、やつぱり無爲のたづねることだけあつて、結局わか  
らずじまひか。さう／＼ナアジャといふ鱗つかひがゐるたよ。無爲の奴、大變な女の名をさ  
いてゐるんだネ。アテイクテにふられた埋合せに今度は鱗つかひか？ いやに鞠窮如とし



てるやがつて、山縣有朋のやうな大望を懐くところが、無爲の味噌かも知れない。

好々爺ふりと云へば、ツアン・ツオ・リンもとう／＼大往生を遂げた譯だネ。男兒すべからく時代なんぞ超越せずに、火つけ強盗やじりきり、酒池肉林で長夜の宴でも張りつづけながら、末は馬革に屍を包むのが花サ。といふと、何だか白浪五人男然として來るが、人生の一面は畢竟水滸傳だよ。英佛獨露伊西諾瑞と歐羅巴の文學總がかりでとびついても、施耐庵とかいふるたのかるないのかわからぬやうな男の、つれ／＼草は貧乏ゆるぎもしない。とかく文字は支那にかぎるよ。と、提燈を持つて見たところで、圖書館長にしてくれるわけやなし、又漆園の番人にさへしてくれ手もない。御説のとほりやつぱり親讓りの、レエズン・デエトルをぶらさけて、一生そいつをもてあつかふだけがオチか。

ところで、あしたのことは太古のままに依然としてわからぬもので、四五日以前突然大衛星が、高等か下等かとにかく島の内からとび込んで來た刑事と稱する奇妙な動物に、サント・シヤノベルまで引ッぱられて行つて、急轉直下にマリイ・アントワネットぶりを發揮した始末サ。第六天は刀利天よりそれだけデアアレクチックだといふ一證かも知れない。

おかげでネアンを御無沙汰して了つた。

さて、けふ、久方ぶりでギイの顔を見たついでに、何となく戸籍調の結果を匂はしてやると、先生ただ一言、

「チャン？」と云つたきりで、そのままキヤフエを置いて行つて了つたよ、臨濟録の評者だつたら、さしづめ「見事」と朱書して置きさうなところだ。

### 潤

キヤフエ ネアンのギヤルソンが「チャン」と決定したわけかね？ シヤ・ノアルのギヤルソンだつたら多分「ニヤン！」と云つたにちがひない。まつたく簡にしてサツパリ要を得んのが如何にも彼らしいよ。だからこそネアンなんかと云ふエタイの知れんキヤフエにいつまでも尻を落ちつけて居られるのだらう。僕は上海四馬路の珍紛館と云ふ宿屋にとまつてゐる頃、隣室の「ホアンチュウ」といふ奴に度々悩まされたものだが、まつたくア



レには閉口したよ。夜通し「チャンホアンチユウ」と云ふやうな掛聲をあたりかまはず我鳴り散らすのだから、まつたくやりきれたものではない。あんなエキスクラマシオンばかりきいてゐると、支那の四聲にもアイツがつきて、「文字」まで疑はれてくるが、「遊仙窟」など云ふ「形象」に接すると、忽ち精神が神韻漂渺としてくるからまことに争はれないものさ、僕もその昔はノロマジ論者だったが、遂に兜を脱いだ始末さ、へたな娑婆氣を起して巴里なんぞへ来るより、四川の山奥かなんかへ行つて晝寢でもしてゐた方が遙かに氣が利いてゐると、今更自分の頭のわるさを痛感してゐるわけさ。

時に、大蛇使ひのナアジャには一寸僕も度膽を抜かれたね？——僕が東海道の宿驛川崎に流寓してゐる時、東雲座と云ふ芝居小屋で偶々大蛇使ひを見たことがあるが、ソイツが今もつて時々僕を悩ますのさ。名のみの洋装にボンネットをかぶつて白壁のやうな厚化粧をほどこし、ホリブルな口紅をつけた女が熟つたやうな大蛇を胴體や、首に巻きつけて奇聲を發してゐるのをきいてゐると、まつたく全身に粟を生じたものさ。それはいいが、二三日して、僕は宿醉のビールをこれも名のみのフランスバアに傾けてゐると、五十恰好の

色の赤黒い婆さんがひとりで這入つてきて、ウイステを立てつづけに二三杯飲んだものだ。その婆さんの顔は恐らく地獄から只今舞ひ戻りましたと云つてもいいやうな凄慘そのものの表情を満面に湛へてゐるが、眼光はまつたく鱗そツくりさ。僕は彼女を目撃してゐるうちに思はず、身慄ひがしたよ、——恐らくナアジャと云ふ女も行末はその婆あみたいになるのぢやないかと思ふと、見ない先から僕は薄氣味がわるくなるのだ。

衛星を引卒して歩くのも樂な仕事ぢやあるまい——アントワンネットの尻ぬぐひなどさせられてはまつたく助からない——が廻る小車の一小節で、クサビ位にはたしかにならうと云ふものさ。

岩野泡鳴氏は昔伊藤博文の最後をしきりと羨望したものが、僕はチャン・ツォ・リンの馬革などには一向感服出来んね。男兒の本懐なんぞと云ふ手品師のウワゴトにひつかかつて、大向ふの喝采を博すのを唯是れ畢生の事業のやうに考へてゐられるところが、至極甘チャンなものさ。

窈冥先生が僕の「日月の背理とその運行」を批評してよこしたが、相變らず雲を捉むや



うな文章で譽めてくれてゐるのか、ケナしてゐるのかさつぱり見當がつかん。  
「子は背理のみを観るに敏にして、未だ常道を察せず、しかれども予子と化を觀て、而して化また我に及ぶ、我又何ぞ悲まんや」と結んでゐるが、畢竟「チャン！」と大差なしだ。

無

春も臚に白魚の……か。めぐる因果の小車は河竹だが、それにしてもコンシエルジエリの流に掉さすのは、天龍を下るより茶々が淵だ、西行ならば歌よまんと、いくらハイカイがつて見たところ、地の底の林檎ぢやア、運動の法則にはかなふまい。そこで一石先生が小首を傾けて、錦屏山の松の木の下で、南斗北斗の向ふを張る氣にもなれるわけさ。「ニヤン」といや、「ボン」とつくだ。天下はカンブクロか、ここに刈り取る眞柴垣も、白壁の土藏を二つ三つせしめられちやア、さすがに、新左衛門、うい奴！ でもあるまいぜ。山寺の和尚さんが還俗して、馬草齋といふイリユウジヨニストになつて、ミユゼ・グレヴァ

ンへ黄金の玉子をハンケチから出しに行つたわけでもあるまいがね。さア、大蛇、大蛇！ さ、代は見てのお戻りだ。要するに、巴里だよ。モンバリだよ。パリキトウルヌだよ。キメウキテレッツだよ。

たしかにそのウイステの婆さんに相違ないと思ふ。アルプスの細徑で、ギイの親仁に一杯くはした女は……フランスソワラツサアルが、涙をこぼしながら、「先生にあの奥さんがお出でになつたら」などと、ガラにもない愚痴をこぼした。その當年のお嬢さんのなれの果に相違ない。ダンテだつたら、どの邊の地獄へ引張り出してゐたものか知らんテ、しかし、その事をウツカリギイに洩らしたら、又ぞろ「チャン！」をきめられるにきまつてゐるから、これはアアントルヌウだ。

へえ？ 窈冥先生クリチックをよこしたつて？……「化また我に及ぶ」か——古いねえ——さうしてそれぢやア一向批評にも何にもなつてゐるやしないぢやないか？ 尤もそりやア、アプリアオリを認めないところに、先生の立場はあるんだらうが、さういつまでもアンチノミイでの立往生ぢや、ディアレクチックの堂々めぐりがそのうちにはじまるぜ



……賊々だよ。ところで、その「日月の背理とその運行」は、ちつたア受けてるんかネ？  
又その印税の方はこのごろどんなことになつてゐるんだい？ 呵々山房のことだから、竹筒の方だけは、そりや如才もあるまいけれどね……

四川の山奥か……いいねえ。これからだつて晩くはないせ。僕も衛星どもがそれぐにそのところを得て、マンハッタンへでも納まれるやうになつたら、いづれ四皓に随ふつもりでゐるんだが、日月の背理のためかどうか知らんが、その運行や遅々たり矣だ。ビュツフォンやフローベルを待つまでもなく、何事によらず、「ロンダ・バアシアン」そこが御方便のところ、命のあるうちは出す入らずだ。

君は「チャンホアンチウ」にあてられたやうだが、四馬路ちやア無理もない。四聲はアグレイ・ニートネスとはアソリユマンにインコムパティブルだ。お好みの遊仙窟だつて、平上去入で行かなくちやア、蜀は愚か隴さへもむづかしい。従つて米饅頭をかぢりながら、アリヤリヤの大蛇でも見てゐるより所在がなくなることになる。

蜀山元として阿呆出づサ。秦か漢かは近代か、ボリシエビズムかシユールレアリズム

か何か知らぬけれど、尤も青牛に乗つて白雲へ没して了つちやア、すこし行きすぎて了ふ恨みはなきにしもあらずだが、とにかく樊噲が馬鹿正直に築きあげた棧道なるものを、一度は徒歩で涉つてから死にたいネ。ナボリ位ちやア、あんまり一生が短かすぎる。「ギタ・ロンガ・ブレギス・アルス」。千古の金言も書きそこねると、とんだハキチガヒを傳統して了ふことになる。あなかしこくか。

さうく、そのあなかしこで思ひ出した。獅子石大官人が倫敦から飛行器でブルツセルへ赴く途中、ラ・マンシユのまつただ中へ、ドブンはまつて了つたさうだ。

### 潤

物事はなんによらず最後の一ツ手前と云ふところが千萬に一番のカネ合で御見物の喝采に預かるのださうだが、ブリユウブルに乗つて大官人のやうにラ・マンシユの藻屑になつては市が榮へて面白くないね——やつぱりヴンサンヌのフェトでやつたやうに御見物衆



の頭上をスレ／＼に滑走して手に汗を握らせスーツと舞ひ上るやうな手ぎわで行かなげりや鳥人とは云へないよ。尤も大官は名前からして落下するやうにデスチネされてゐるからね——柄にもない飛行機などに乗るより猫にカンブクロでも被せて椽側からリオンストーンと落ちてゐた方が愛嬌があつていいわけさ。

天龍に掉して薄明に北斗を指さすのも、置炬燵に臥そべつて金瓶梅を耽讀するのも、還俗して呵々山房の番頭になるのも、灰吹から蛇を扇ぎ出すのも、それぞれ一バシのイリュウヂヨニストでなければ出来ぬ離れ業さ。蜀の棧道を三度に一度は渡りたいのも随分と馬革齋的アバンチュールだ。スフィンクスにしる阿呆宮にしる、みんな人間のアンニユイエから生じたイリュウヂヨンの玉子だと思ふと、「ロングバアシアンス」も樂ぢやないね、「終りまで忍ぶ者は救はるべし」とは欠伸を噛み殺して、南京鼠の藝當を息のある間は續けると云ふ多分御宣託にちがひないと思ふが、それを陰から舌を出して嗤つてゐる奴が何處かに存在してゐると思ふと、堂々めぐりをしてゐる奴こそいいツラの皮の半兵衛さ。

「日月の背理とその運行」も御蔭で少しは賣れてゐるやうだが、どうせ窈冥先生輩の提灯

位では甚だ薄ボンヤリして影が薄いね。しかし僕としてはアインシュタインのリラチビチイに逆手を喰はせた積りなのだが、カオスの中軸を分解して、オニオンからイオンを放散させ、一切の現象を單にオニオンの層の重積であると云ふ極微な方程式に捏ね上げるのに恐ろしく苦心慘愴したが、どうも未だわねながら不充分的點があるので、當分その方は見合せて「バクネオロヂイ」に専心してゐる始末なのだが、あれをどうにかハッキリしないと僕の學説の根底が頗ぶる怪しくなつて、サタン博士のいい物嗤ひにされることになるのでこのところまつたくアンチノミイの立往生さ、尤もそれと竹筒の方とは幸ひなんの關係もないからその點は安心してくれ給へ。

ギタ・ロンガもいいが恥を更科ぢや、月見蕎麥も一向うまくないね。しかしモンバリには幸か不幸か蕎麥屋も壽し屋も一軒もないのだからでんで問題にはならんよ。油でヌラついたヌイユやマカロニぢやアイカイも裸足で逃げ出すね。

ギイが君のことを「あの方は『スコットランドヤード』にでも御出でになつたことがあるのですか？」と聽いてゐたよ。大方ヘルロツクシオルムスの兄弟分とでも思ひ込んでゐる



のだらう。

無

さすがに大小説家の落胤だけあつて、ギイは目が高い。一瞥してウヂエーヌ・シユウのエピゴーネンとにらんだところは驚入る。直覺はすべての本能と等しくたしかに遺傳だネドクトル・リュカの説は廢墟に歸して了つてはるるが、その風蕭々たる斷碑遺構から、君の所謂「バクネオロジイ」のプロトゾアも發生したかと思ふと、前世紀のドルマンも中々馬鹿にはできないよ。

ユークリッドにはじまつてニウトンに及ぼうが、ピタゴラスに芽をふいてアインシュタインに根を張らうが、さうしてそれ等の數論に對抗して、又候君がヂウジツを試みつつあるところの所謂オニオン分析法なるものが、果して三十世紀の學界にまで須彌山上のアンニユイを持越さうが、カオスの依然としてカオスたるところだけは、どうにも致し方はなさ

さうだネ。字を知るは憂患の始なりさ。途方に暮れるのは決してインテリゲンチアのトドのつまりではなくて、實は大きにそも馴れそめのはじめからなんだからフアタルだよ。さうサ。和泉の國では牛の角で鯛を釣るか、ユーリピデスのお禮にヒメトスの蜂蜜が所望とあるのも、「日月の背理とその運行」から、モンパリーで仲見世の筑蕎麥にあこがれるのも、畢竟はアナトル・フランスの大きらひなヂエオグラフイの問題かも知れない。やれまてと云はれて顔を赤城下さ、高がギタロンガとノスタルヂイの鉢合せだけぢや、中々シラと正面とを等分にきつて、東西々々、御看客様方のお手拍手御喝采を強要し得る勿論藝當のうちへは這入らないよ。咄哉々々、ロンゲバアシャンスだ。さうしてどつちをどう向いて見たところでいいツラの皮はいつの世の中でも依然として半兵衛にきまつてる。南京でも天竺でも、ドロ〜と云やア、荒獅子男之助にふまへられた、おのれもただの鼠なんだから、なるべくベストの流行地は見ぬふりをして、ここもとは、まア、スベゲツテイ・ア・ラ・イタリエンヌに、バルメエザンでもウントコセとふりかけて、クル〜とフオクに巻きつける練習を怠らないことさ。



そこでネアンだが、先日の戸籍調以來、どうもギイのセルギス振がわるくなつたやうな気がするので、キャフエがうまくない。さうしてキャフエがうまくないと、僕の一日は忽ち索然として了ふ。

人生は索然だよ。砂を噛むやうなところだよ。砂漠だよ、然るにマアテルリンクは「テルミノロヂイ」だし、君は「バクネオロジイ」だ。さうして僕はとうとう「蜃氣樓さへ見るよしもなくなつた、「ヤブカラコウジのブラコウジイ」か。

「オー神様！ どうしてくれるんだい？」と、大空に向つて思ひ入れ唾がはきたくなる。ボン・ソア……

## 絶望の書



ものろぎや・そりてえる

虫が鳴いてゐる——まさに秋だ。秋になると虫が鳴く——別段今更珍らしいことでもない——子供の時分から幾度となく聴いてゐるのだ。しかし、かうやつて静かな真夜中にひとりで虫の啼いてゐるのをきいてゐると——まことにいい氣持で、なんとなく生れて始めて虫の啼くのをきいてゐるやうな氣持がする。

いい氣持！なのは、自分がいい氣持だからなのだ。虫の鳴いてゐるのをきいていい氣持にならない人間も澤山ゐることはきまつてゐる。

自分はなぜいい氣持なのか一向にわからないが、實になんとなくいい氣持で耐らないのだ。だから、今夜は久しぶりで物を書きたい氣持にもなつたのだ。まつたく不思議だ。

全體、自分と云ふ人間はひどくわがままな上に恐ろしく氣紛れな人間なのだ。しかし、これは生れつきなのだから、恐らく死ぬまでなほりつこはあるまい。文句があるなら、自



分をこんな風な人間に生みつけてくれた両親か、神様へもつてゆくより仕方もあるまい。自分は自分の持つて生れた氣質をイヤが上に助長することはあつても、それを矯め直さうなどとは金輪際思つたことはない。

だから、人の爲めに物を書いたことなどは殆んどない、同時に、自分が感じないことや考へないことを書いたこともない。要するにあまり融通が利かな過ぎるのだ——この自分の頭は——自分の頭で考へてゐる理屈から云ふと、人のためにも、犬の爲めにも、豚のためにもなんのためにも書いたつて一向差し支へないとは思ふのだが——さて、なにかしら書く段になると、自分の勝手氣儘なことしか書けないのだ。幸ひ、僕の書く物を喜んで讀んでくれる人があるから、買つてくれる雑誌社もあるわけだが、若しそれがなかつたら、自分はとうに餓死してゐるに相異なる。

洋行してかへつてから、僕は殆んど物を書かないので——會ふ人毎にどうして書かないのか？！と、うるさくきかれる。書けないから書かないのだと答へるより仕方がない——實際、書きたいのだ、書きたいと思ふがどうしても書けなかつたのだ。イヤ、實は随分と書

き散らかしたのだ。それは洋行してかへつてからばかりではない。巴里の安下宿の五階の一室にくすぶるかへつてゐる時にも、色々と書き散らかしたのだが、どうも思ふやうに纏まりがつかないので、みんな反古にしてしまつたやうな次第だ。

などと云ふと、さも藝術的良心が鋭いやうにきこえて、人ぎきがよささうだが——これはつまり先ツきも云つた通り、持つて生れたわがままからなのだ。自分が書いてみて、思ふやうに書けないから、それで書くのがイヤになつて中止してしまふのだ。他人のために頼まれて、御伽噺しや、探偵物や、チャンバラ物などが書ける柄にあいにく僕は生れてこなかつたのだ。どうもまことに申し譯のないやうな次第だとも、なんとも腹の中では思つてはゐない。

さすがの印税成金？ も洋行してかへるともとの黙阿彌で、素寒貧バレオロガスと云ふありさまだ。仕方がないので、昔、譯した本を手をかへ、品をかへて金にしたり、色々やりくりをして、やつと今日が日まで生活して來たやうなわけだが、秋が來て、さて、虫の啼く聲をきくやうになつては、なんとも始末にならないので、愈々なんとかして金をこ



しらへなければならなくなつた。で、これを書き始めたのだなどと、簡単にケリをつけられたらまつたく降参する。それとこれとはまつたく別問題な話だ。恰かも、洋行をすること、鬼が島へ寶物をとりに行くのとは全然話がちがふやうにだ——。

莫大なめくされ金を浪費して、呆々の體で逃ぐるが如く、異國からまい戻り、悄氣かへつてなんにも書けず、御土産に「露伴」と「鏡花」を持つてかへつて來たとあつてはその邊のお先ツ走りのオツチヨコチヨイから「文士洋行無用論」などと云ふ名論卓説をあげせかけられてもグウの音も出ず、引き退がらざるを得ないわけ合だ——まつたく。

洋行をすると云ふことが、なにか特別にぬうちがあるやうに考へてゐるのがそもそも滑稽な話なのだ。しかし、行くと行かぬとは當人の勝手次第で、命を的にして御苦勞にも北極や、南極へ出かける人間さへある。金さへあればどんな阿呆でも世界見物位は出来るのがあるがたい文明の御時世だ。僕から云はせると、毛唐人がヨケイな智慧を絞り出して色々な御セツカイをするから、阿呆な奴が頼まれもしないクセに洋行などをしたがるのだ。その阿呆の代表みたいな顔をして生きてゐるのが、自分と云ふ人間なのだ。これは洒落

でも皮肉でもないのだ。小利口な奴等なら、世間にはウヂヤ〜と腐る程、轉がつてゐるのだ——偶には自分のやうな阿呆のひとりや二人位ひるたつて人類の名譽になりはこそすれ、少しも恥辱にはならないと思つてゐる。僕は自分を阿呆だときめてゐるわけでもなければ、卑下して自分を阿呆と稱してゐるわけでもない——寧ろ僕は自分の阿呆を誇りとさへしてゐる位である。

主義や、階級によつて極めて簡単に自分と云ふ人間を片付けられることは眞平御免蒙りたい。僕のやうな顔をした人間は世界中に幾人あるかしのれないが、幾人ゐたつて、それは單に僕の顔に似た顔の持主であつて、僕と全然同一な顔をした人間は恐らくるやあしまいそれは諸君の場合に於ても同然である。そのやうに僕の思想や、血肉がどんな風に他と類似してゐるやうが、最後には僕だけが獨一無二のものを持つてゐるのだ。自分の個性が獨自であればある程、自分を自分として表現する意義を生じてくるわけである。

「作家の犯す最大罪惡は既定の規範や、教理と融合し、それ等を模倣し、それ等に降服することだ。作家は自分の個性の反影たるに止まらず、是非とも一層擴大されたその反影でな



くてはならない。人が文章を書くことに對する唯一の辨疏は自分自からを書くことだ、云ひかへれば、その個性の鏡に反影した獨自の世界を他人に表示することにある。——これはグウルモンの有名な言葉だが、僕もなにかしら物を書く以上は少なくともこの態度の上に自分を据へたいと考へてゐるのだ。マルクスのイデオロギイや、ルナチャルスキイの藝術論や、トルストイの屁理屈がなんであらうと、かんであらうと、僕は自分が信ずることの出来る態度しかとすることは出来ない。時代の潮流に逆行しやうが、外れやうがそんなことは頭から問題ぢやない。プチブル的だらうと、ルンペンインテリゲンチヤ的だらうと、反動的だらうと、諸君はなんとも勝手に命名するがいい。そんなことに僕はびくともしないばかりか、てんで頭からそんなことは問題にしはしないであらう。僕は自分と反對なものの數が殖えればふえる程、僕自身をハッキリ感ずることが出来るばかりである。

僕は自分が百姓でもなく、職工でもないと同時に、科學者でも、哲學者でも、恐らくまた藝術家でもあるまい。僕は現在の社會制度に於て如何なる職業にもありつくことを好ま

ない甚だアンチソシヤルな人間なのだ。生産に従事したことなどは自慢ぢやないがまだ一度もない。恐らく、都會の黴菌よりもつと有害無益な人間であるかも知れない。僕はしかし物を書くことによつて、自分の存在を明らかにしてゐるのだ。自分の今迄やつた仕事は人類のために役にたつてゐるか、國家のために有害になつてゐるか、そんなことは僕の關知するところではないのだ。僕は淺薄なセンチメンタリストでもなければ、甘つたるいユートピヤンでもないのだ。僕はディオゲネスや、エピキュールの弟子であると共に、ヘラクリトやバピニの友達でもあるのだ。僕にだつて少數の味方はある。現にニユウヨークのイースト・サイドに Benjamin De Casseres と云ふ男があるし、前橋に萩原朔太郎と云ふ詩人もゐるのだ。その他、佛陀もあれば、莊周もあれば、スピノザもあれば、スチルナアもあれば、シヨウベンハウエルもあれば、ニイチエもあれば、グウルモンもあれば、アラゴンもあれば、ブルトンもあれば、エレンブルグもあれば、李太白もあれば、東坡もゐる。味方の名前をもつとあけると云ふならいくらでもあけてみせるが、虎の威をかる狐とまちがへられ



世間の人間は有名でないと驚かないから、なるべく諸君の知つてゐる名前を持ち出したのだ。これ等の人間がダメと云ふなら、僕もダメなのだ。寧ろダメなことをもつて、自分の誇としやう。

さて、季節外れの洋行の話でもしやうか？——自分を出かける前にこんなことを書いた——私の思想や、生活態度がどんなものであるかと云ふことは、みなさん先刻御承知の筈である。私が西洋へ行つたからと云つて、それ等のものが遽かに改まるわけのものではあるまい。私は自分の洋行をなにか特別な意味に考へたくはないのだ。今まで日本のあちこちを歩きまわつた延長だと考へたい。至極アツサリした氣持で出かけたのだ——。

しかし、イザ出かけるとなつたら、あまりアツサリした氣持で出かけられはしなかつた。それにコドモ連れなのだから、いくら呑氣な自分でも、さうアツサリは出来なかつた。僕が巴里へ自殺しにゆくのだなどと云ふ噂をした人間がゐるのもムリもない、だが、僕はそれ程、ロマンチックでもないが、永年不攝生な生活を續けて來たので、行く前にはかなり健康を害してゐたのだ。勿論、死ぬ覺悟位しなくつては東京の往來を歩くことさへ出来は

しまい。いくら便利になつたからと云つて四十日あまりの航海はそんなに樂なものぢやない。かへつてからも僕は色々ヒドイ目に會つた——旅疲れや、諸々の不快な出來事のために身心ともに激しい疲勞をかんじて、まったく今迄にない程の弱り方をした。しかしそれ等をやうやく切りぬけて、やつと近頃になつて健康をとり戻すことが出來たのだ。僕はかへつてから、まだ在佛中に色々世話になつた人達や、出發前に色々親切にしてくれた人達に對して、ロクに挨拶もせず、ジツとひとり考へてばかり暮らしてきたのだ。自分の愚かしさは云ふまでもないが、人間の如何に殘刻で、恐るべきかを泌々とかんじさせられたのだ。幸ひ無想庵がかへつて來てくれた爲めに、僕はどれ程、彼によつて慰さめられたかしのれなかつた。僕一箇の氣持から云へば再び彼を巴里へかへしたくはなかつたのだ。しかし、彼には彼でかへらなければならぬ充分の理屈と事情とがあつた。僕は無理に彼をひきとめるわけにもゆかなかつた。

人間が殘刻で、恐ろしいなどと今更泌々と感じる程、それ程センチメンタルになつたのはまつたく身心が衰弱してゐるためなのだ。——毎日、ねながら、自分はタバコばかり吹か



してゐた——。

ねてばかりゐるのだ。さうしてねてばかりゐるのだ。ねてばかりゐて、タバコばかり吹かしてゐるのだ。

ねてばかりゐて、タバコばかり吹かしてゐて、少しも怠屈をかんじないのである。退屈をかんじないからねてばかりゐるのだ。ねてばかりゐて、退屈をかんじないからタバコばかり吹かしてゐるのだ。

吹かしてゐるのはタバコである。かんじないのは退屈である。だからねてばかりゐるのだ。

なぜもつと書かないのか？

書きたくないから書かないのだ。

なぜ書きたくないのか？

書くことがないからだ。

なぜないのか？

書くに價することがないからだ。

凡そ羨望に價するもの存在しないことはひどく人間を退屈にかんじさせるものである。洋行でもしてみやうか？

にらるどみらり——みらるどにらみ——みらるどみらり——らどみらみらみ——地球は廻轉してゐる——御苦勞にも廻轉してゐる。廻轉を繼續してゐる間は一緒に付き合はなければならぬ。御苦勞にも付き合はなければならぬ。酒でも呑むことにしやうか？

急激なるテンポ——スピートの時代——なんとかしてサイサイと云ふ悲鳴をきくと痛く心臓が悲しくなるのである。

でめんちあ・ぷらえこうくす・き・たとにや——これがおれの病名なのだ。別段ドクトルに診察してもらつたわけではないが、唯だ自分でさう極めてゐるだけの話だ、おれを正當な人間だなどと思つてもらつては困る——。

ねながらタバコを吹かして、自分はこんなことをノートの端に書き散らしてゐるのだ。



辻潤が巴里のモンマルトル邊の陋巷で餓死でもすれば甚だ理想的で、至極御誂ひ向きだつたかも知れない。しかし、彼は僅か一年たらずでノメ／＼とまい戻つて来てしまつた。恐らく

巴里寒燈獨不眠 苦心何事轉凄然

故郷今夜思千里 霜鬢明朝又一年

と柄にもないノスタルヂイにとり憑かれたのでもあらう。

兎に角、僕は千九百二十九年、正月の三日午前九時何分かに品川驛に着いた——至極の上天氣で、御殿場あたりで窓から覗いたらお富士さんが薔薇色に輝やいてゐた——だから僕は早速思ひ出して「マルメラドフの御爺さんがよろしく云ひましたよ」と御富士さんに向つて挨拶した。マルメラドフと云ふのは僕が勝手に命名した名前だ、ほんとうの名前はなんとかスキイと云ふワルシヤウ生れのポーランドの御爺さんのことだ。この御爺さんがゐなかつたら、僕等はとんだ厄介な目に合つてゐたかも知れない。ハルピン長春間の東支鐵道の三等客車の薄汚ないバンクの一番上にこの爺さんが臥てゐたのだ。二番目に僕がね

てゐた。狭苦しいので辛うじて身體を横たへてゐると云ふばかりだ。人相のわるい車掌だか、監督だかなんだかわからないが露西亞人と支那人が二三人でカンテラをブラ下けて屢々車中を見廻つてゐるのだ。やがて、例の如くバスボードの検査が始まつた。實際、巴里を出發して日本に着くまで何邊バスボードを調べられたかわからない。バスボードと切符を持つて行つたが、いつまで経つても持つてきてはくれないのだ。しばらく経つてから、露西亞人がやつて来て、なにかしきりにグヅ／＼云ふのだが、僕にはサツパリなんのこともわからないのだ。上にねてゐるワルシヤウの爺さんがゐなかつたら、僕等はどこかの停車場に下車させられて、一晩位ひ拘留を食つたかも知れなかつた。これより先き、僕は御爺さんと色々な話をしてゐたのだ。御爺さんの辯明がなかつたらまつたくどんなことになつたか知れたものではない。後でできれば怪しまれたのはムリもない話なのだ。歐羅巴歸への日本人で、東支鐵道の三等に乗つたのは恐らく僕等がレコード破りだつたかも知れない。僕の持つてゐた切符をかれ等は始めて見たのだと云ふのだ。それに、日本人としては随分風變りの日本人に見えたに相異なる。さう云へば、僕は巴里にゐる時だつて、自慢ぢ



やないが、日本人だと思はれたことはめつたになかつた。ある時などは日本人から、失禮ですが、あなたは日本の御方ですか？」などとやられて閉口したこともあつた。御爺さんは浦鹽の大學を出た人で、特に日本語を勉強して、日本にもしばらくゐるたばかりでなく、日本の女としばらく同棲したこともあると云ふ類なる堪能な日本語を繰つる人であつた。僕はこの御爺さんと巴里の話や、ポーランドを通過した時の印象や、露西亞文學の話などをしてゐたのだ。別れる時に、御爺さんは「日本の御富士さんによろしく云つて下さい」と微笑しながら、僕の手を堅く握りしめた。僕はまつたく地獄で佛にあつたやうに嬉しかつたのだ。だから、僕は薔薇色に輝やいてゐる富士を車窓から仰いだ時に、御爺さんとの約束を果したのである。

毎日、僕がかへつてから、御天氣續きで、朝も早く起きられ、自然と早く眼が醒めて、醒めると、窓ガラスに一杯おてんとさまがさしてゐるので——それだけで、僕の心はなんとも云へない嬉しさで一杯になつて——なぜと云つて、僕が出発する十二月の半ばには巴里は既に冬景色で、夜が明けても午前中は空が黄色く濁つて晝頃から、やつと日の光りが

薄ほんやり出るかと思ふと、午後の三時頃にはもう夕闇がせまつてくるではないか——起きて、床を畳んで、掃除をして、おふくろと久しぶりに差し向ひになつて御茶を飲んだり梅干を食べたりして——いい氣持になつて、まつたく日本と云ふ自分の生れた國のありがた味をつくづくと味はつたのだ。

自分がかへると、早速自分の好きな掛軸を床の間にかけた。「世間苦樂無別好事不好事已」——筆者は「不滅、成滿」と云ふのだが、この軸は僕の生前から、僕の家にあるので、僕が生れてから最初に見たのが、この掛軸だと云ふことは僕の幼年時代からよくきかせられたものである。僕がやつと口がきけるやうになつてから、僕はこの掛軸を「赤いジイジイ白ジイジイ」と云つてゐたさうだ——なぜなら、この軸は薄桃色のきわめて粗末な紙表装でふちどられてゐるからだ。なにか氣に入らないことがあつて、僕がむづかつたり、泣いたりした時に、家人が僕を抱いてこの掛軸を見せると、すぐとニコ／＼して機嫌がよくなつたものさうだ。それ程、これは自分にとつて因縁の深い掛軸だが、その文字の意味がやつとよくわかりかけたのはほんのこの四五年來のことだ。それに「不滅、成滿」と云ふ文字



も變テコな號だと思つてゐたら、僕がある時、普覺禪師の「大慧書」と云ふ本を讀んでゐる時に偶々「——過去現在の諸佛菩薩、阿耨菩提に於て已退もなく現退もなく、當退もなく、凡そ求むる所あれば成滿せずと云ふことなきは皆誠至の及ぶ所によつてなり」と云ふくだりを讀んで卒然として「なる程」と思つた。

Monsieur Jonan の掛軸は床の間から「おまへの洋行したのは好事だよ」と云つて笑つてゐるやうに僕には思はれたのだ。——僕は、腹の中で——「いかにも」と答へた。

洋行 洋行 洋行——まことに御苦勞千萬な滑稽事である。そんなことを強ひてやるとは好事でなくてなんであるか——まことに「赤い字と白い字」とに嗤はれても自分はいたづらに赤面するばかりだ。

浮遊不知所求——阿呆の一つ覺えのやうに僕はこの十數年來、それを實行したり、偶々好事な人間が、僕に字を書いてくれと云ふと——得意になつてそれを書き散らして今でもゐるのである。東京驛を出發する時に「悪い仲間」のHがなんでもいいから書けと云ふので、汽車の窓から紙切れを彼に手渡したが、その紙切れにもその文字が記されてゐたのだ

姫路行の三等別車が僕等に乗せてゐたが——窓から覗くと澤山の人達が見送りに來てくれた。僕のやうなヤクザな人間がなんだかわかりもせずに出かけると云ふのに——澤山の人達がみんな名残り惜しさうにして見送りに來てくれるのがなんとはなしに不思議にも亦ありがたいことのやうに、また甚だ申譯がないやうにさへ思はれた。なんだつて自分はいから歐羅巴くんだりへ出かけるのだ——このままやめにしても別段誰れも文句を云ふ者はひとりもゐないどころか、僕と別れることをイヤがつてゐる女性さへゐるではないか？——それなのに汽車は時間が來ると動き出すのである。

夢ちやんが息せき切つてブラットホームを馳けて來た——さうして、なにかしらぬが袋にゐれてある品物を餞別にくれた——それは後から三儀と筮竹だと云ふことがわかつた——巴里で貧乏したら、僕に大道易者になれと云ふつもりなんだらう、尺八とこれさへあればまつ安心だと僕は腹の中で苦笑した。

「おうる ほあ おうる ほあ！」と、僕は帽子をふりながら汽車の窓から顔を出して、夢中に人々の顔を見送つた——まつたくアツサリしたものである——みんなの顔をこんど



は何時になつたらまた見られるのか——などと考へてみても始まらぬ。現にあの時、見送りに来てくれた高島素之君は、歸つてくるともうこの世の人ではなくなつてゐるではないか？。

かへると、見ず知らずの人達から「無事御歸朝を祝す」と云ふやうなハガキやデガミが舞ひこんで来る。それなのに僕は「無事歸朝御禮」と云ふやうな廣告を新聞に出したりする智慧も了簡も全く持ち合せないばかりか、友達にさへなんの通知もしないで毎日ゴロゴロとねてばかりゐたのだ。さうして、なんだつて、外國からかへる「歸朝」と云ふのだからと云ふやうなことを考へたりした。さて、考へてみたが一向にわからなかつた——「朝がへり」と云へば、そりや説明の要もない位ひ、だれだつて知つてゐるだらうが——そこでめつたにひいたことのない字引を戸棚からひき取り出して、まづ金澤博士の「廣辭林」をひいてみた——すると「外國へ行きしもの歸國」とある——如何にもそれに相異ないが僕にはその「朝」がわからないのだ——これでは中學校の入學試験にも立派に落第する資格はありさうだ。こんだは簡野道明先生の「字海」を出して、さて「歸」と云ふ字はなんでひく

のだツけと考へて見たが——しばらく漢字の字典の御厄介になつたことがないので——コイツもすぐとはわからない——やつと巻末の字音索引をひいてわかつたやうな始末——まことにもつて御恥かしい次第だ——これだけでも文學者ヅラをしてゐるのは可笑しなわけだなどと思ひながら——やつと「歸朝」と云ふ熟字を探がしあてて「朝」は「朝廷」の意味だと云ふことがわかつて、やつと安心の胸を撫でおろした。官費の留學生かなにかなら多少その意味にも妥當するわけだが、僕の場合なんかなに「歸朝」だと云ひたくなる。それにしても、滿洲や、ハルビンや、上海や、新嘉坡から歸つたのは「歸朝」とは云はないらしいが云つたつて別にまちがひでもあるまい——どうも言葉の習慣などと云ふものは變なものだとそんなことを考へながら二時間あまりムダに費やしてしまつた。

巴里十四區の——十四區と云ふと南だか北だか——いや多分南だらう——どつちかの端れでボオトルレ안의近所だから場末にちがひない——ボオトは門で、昔は門があつたのだらう——そツから向ふは市外なのだ——十四區にはコンミニストが一番澤山ゐると云はれてゐる位で、つまり労働者の澤山ゐる——従つて貧乏人が澤山ゐるカルテイエなのだ



が——僕のゐるたビユフハロオと云ふオテルの近所は比較的閑静で、小綺麗で、さう貧乏たらしくもなかつたが邊鄙には相異なかつた——そのビユフハロオの五階の二十九番と云ふ部屋のベッドの上で、時々「おれは今、かうしてほんとうに巴里の一隅にゐるのだ——」がどうも「變だ」とひとり考へこんだものだが、今かうして日本の郊外の二階の一室にかうして物を書いてゐる自分の「存在」があゝの巴里にゐるた自分と同一人なのだらうかと妙に不思議にも思はれるのだ。

オテル ビユフハロオの五階の二十九號室で——僕は禁酒しながら、さまざまの妄想に耽けつたり、異人の本や、支那人の本をヒマにまかせて讀み散らかしてゐた。さうして、時々ムダ書きばかりしてくらしてゐた。

### ふらぐまん・でざすとれ

自分は何なんだと？……云ふ疑問に對して一切で無であると云ふ定義は同時になんの定義でもあり得ないが、それ以上に明確な答はあり得ないのだ……矛盾と云ふことはまた一切であり、同時に無だと云ふ意味を含んでゐる。

一切の現象はそれが、現象である限り、悉く矛盾してゐるのである。矛盾は現象を成立する根本原理に他ならない。

細胞は無限に分裂する……一切の現象は無限に分裂する……自己もまた無限に分裂する。純粹な認識は神のみが出来る、茲に神と云ふのは常識的な言葉を偶々借用したまでである。神は矛盾と分裂とを意識しないのである。純粹な認識に近づくことは神に近づくことである。

解脱は逃避ではない。純粹な認識に近い状態を指すのである。



完全な無智は純粹の認識と等しい。維摩の最後の答は「黙」である。不答に等しいのである。

怠屈は一切の能動の母胎である。始めに神は怠屈を感じたにちがひない。

一切の理想主義はそれ自から人間の悪業の一切を造作するものである。その最も下劣なものは人間によつて造作せられたる「律法」である。

即身成佛——とは自己を *as such* として純粹に認識することである。一切の理想をなぐり棄てた状態である。アナルシイはこれ以外にはあり得ない。

André Breton の Nadja から——

『自分は誰れだ?——と云ふ古い言葉をさしあたり自分が發言したとすれば、なぜと云ふに——實際、一切は畢竟、自分が何人を「探がしまわつて」ゐるか、と云ふことに歸せられはしないだらうか? 後の言葉は自分を混惑させ、或物と自分自身の間を奇妙に、だが避けがたく、自分が以前に考へてゐたよりも、遙かにこんがらがつた關係に置くことを先づ承認しなければならなくなる。自分が誰れであるかと云はうとすれば、それ以上のこと

がそこに企てられることになり、生きてゐる自分に幻影の役割をさせ、明らかに自分の存在を危くするに必要な暗示をさへ與へることになるのだ。このあまりに極端であるとも云はれる意味にそれをとるなら、自分の實在の、客觀的示現であると信する一切の物象の多少顧慮された示現は、この人生の制限内に於て、一つの行動の過ぎゆく蔭であり、その眞實の舞臺は全然自分にまで不可知であると云ふやうな理解にまで、自分を連れてゆくことになる。「幻影」と云ふ言葉の與へる表現は、それがコンエンシヨナルに對して與へたもの、その面影に於て、將た時と處の或る聯關にまでの盲目的眼從に於て、先づ第一に永遠らしく見える苦惱の完全な繪畫として、價値あるらしく自分には思はれるのである。恐らく、自分の生活はまさにその種の一映像であらう。さうして自分は自分の足跡を辿る宿命を擔はせられるのだ。たとへ自分は自分の忘却した小部分を學び、自分が極めてよく認めなければならぬものを知らんと試み、探險せんとして發足するものと信じてゐるにせよ。自分自身に對するこの見解は自分にとつて、それが自分自身に對して自分を臆測させ、それ以前の心層に於て、氣儘に自分の思想の完成せられた面貌を位置する限り、虛妄に思はれるので



ある。……その面貌こそは時間と同意する何等の理由をも持たず、同時にまた挽回しがたき紛失、後悔、或は落伍、若しくは道徳的根柢の缺乏——それはなん等論議の餘地を許さないのだ——をも含むのである。重要な一事は、自分が徐々に自分自身の中に発見しつつある特別な諸性癖が、自分に與へられることなくして、自分自身のものとなるであらう。一般の傾向を自分が探ぐる邪魔をしないと云ふことである。自分の有する一切の趣好を越へて、自分が有すると感ずる諸々の愛着、自分の場合にのみ起る諸々の出来事を越へて、將た自分を造りなす無数の運動、自分のみの經驗する諸々の情緒を越へて、自分は自己の關係を明らかにするために自分を驅つて、自分の相異がなから成り立つてゐるか、或はそれが何故に存在するかを發見させやうとするのである。自分が他の人々の間にあつて自分自身に示現せんとすることの相異を如何に意識するかの場合にこそ、自分がこの世に生を受け、自分のみが有する使命を明らかにし、自分の頭腦にのみかかるその宿命に答へることが出来るのではあるまいか？」

これは自分が始めに引用したグウルモンの言葉の意味をやたらにむづかしくひねくりま

わして表現したものに過ぎないのだ。「ナアジャ」と云ふ女のことを小説に書くのにこんなひちむづかしい理屈を先づ巻頭に述べなければ氣がすまないところがブルトンのブルトンのところだ——と、自分はいたく嘆息したのだ。

理性で一切を解釋しやうとすれば、結局氣が狂ふだけの話だ。白鳥はまだ死なずにゐる。

秋の眼がジャルダンブラントの空から覗いてゐる……木の葉が幾枚でも落ちてくる。

アムンゼンの死骸が白熊に喰はれたとグリニツチの天文臺からキャフエ・バルナスに放電された。おれはシャボオ・ムロンをかぶつてニノフランクと話してゐたら、肩にフケが一杯散歩してゐると云ふので、リリエンヌ・ド・シャプロンドと云ふ淫賣に嗤はれてしまつた彼女はそれから、詩集「アステルホルン」を出して、ペリカンのやうにそのいくつかを朗讀してきかせた。

トランクには荷物が少しばかりつまつてゐる。おれにはギヤールドノールからいつでも千里を失敬する用意が出来てゐるのだ。机の上にはピツコやメツカチのファンタジオがジ



「ザグに踊つてゐる。二時にサンシユルピスの鐘が鳴るときまつて腹がすいてくる。しかしおれは二十本二法二十五サンチームのエレガテンを吸ふだけで、別にスーブをこしらへやうともしないのだ。」

「智能が危機に瀕してゐる」とボオル・ヴレリイが云ふ。「汝等自身メリケン化せ！」とレーニンが臨終に宣託する。おれはア・プリオリに「きやといえむ・でいまいよん」のベドラムに納まりかへつてゐるのだ。そこでは永遠に「時劫」が失はれてしまつてゐる。

エトワールで仔犬をひろつた夢を見た。眼を醒ますと、窓ガラスに一杯日光がふりそそいでゐる。キャフエ・ギヤイエテではもう朝つばらから「アレルヤ」のホノグラフを鳴らしてゐる。ブーロンニユの森で首を縊つたKが向うからトワールを抱へてやつて来るではないか。——マダムが「ボンジユール」と拶揆してゐる。首を縊つても畫が描けると思ふと、巴里と云ふところはまつたく藝術のバラデオソオですね——と云ひたくもなる。

れすぶり・どりあんたるで物を考へると、結局、大牢の美味は鹽粥だと云ふことに歸着する。トランクをぶらさけて今夜出奔することにしやうか？

コロンの海邊で拜んだ御太陽様だけは忘れられない。眞赤な火の玉がクルクルと地平線に消えて行つた時は、眞珠の涙がハラ／＼と轉び落ちた。土人の素足に蛇のからみついてゐるのをみてガンダラの彫刻を思ひ浮べたが、キャンデイへ行くことは見合はせた。アラビヤの沿岸を通過してゐる時、フト波斯のウルマルカイヨームのことを憶ひ出したら、薔薇と酒盃とが虹のやうに空中に浮みあがつた。

おれの現在此處には不在だ

おれはおれ自身で包まれてゐる

さしまねく遊星とてもない

生はおれを無視して存在してゐる

おのが眼の上の手より生まれ  
わが歩みよりわれを外づし



影はおれの歩行の邪魔をする

おれの宇宙の王冠の上に

大きな宿の鏡の中に

逆さに動く破れた鏡

習慣と驚きとが

かたみがはりに倦怠を創造する

冒険はその競争者の首の上にはぶらさがる

愛の眼差しは再び自からを見出しては

あらぬ方へと外れてゆく

置き去られた所々に諸々の眼の集まる場所に

人間の面貌の凡ゆる冒険

反響なき叫び 死の嘆息き 知られざる時

嗚呼！ 数知れぬ愛らしき顔々よ

それさへ涙にかくされて見え分かす

夜をば誓ふ無数の眼 眼 眼

戀人は共に死にゆく

巖の下に数多の接吻 雲なき水の溢れよ

永遠の不在より這ひ出づる幽霊ども

愛されるに價する一切の物

寶物は壁であり その影は盲目ひたり

愛のこの世に存するはこの世を忘れたために他ならぬ

×

スピイドを食ほらんと願ひにまつはり

鉛の如きノロキ歩にとりまかる

壁は最早かたみに顔を見合すことなく



いやが上に重なりゆく物象 存在の團扇よ  
巻き髪のもつれは

血ばしる反省のうちに眠る

大地は獍猛の怒りに荒びて

その手掌をば示すなり

前額の炎ゆるがなべに 眼は閉ぢらる

真夜中の勇氣 半ば影を減らしつつ

影の鏡 この夜を半ばし

頭は眠と夢の間にうなだる

X

Paul Eluard は實際、近代的エレミヤのひとりには相異なるのだ。われわれの同屬でエレミヤでない者が何處にゐるか？ 爾らば御眼にかからない。

智識の死骸に驢馬の死骸が頭と肉にいつでもこびりついて彷徨つてゐる。勇敢なのは空想の世界に於てのみだ。腹の爲めに必要な材料はいつでも卓子の上に載つてゐる。人氣のない濱邊に、寂しい疲れはてた人間が一切の色彩を直線でこねまぜてゐる、思想はジツト動かすに、永遠の現在を無視しながら、頭はいつまでも束縛された肉體のうちに擒となつてゐるのだ。藁のない夜だ——彼女がインクの寂寥のうちに凝視してゐる。

おれの眼の蛹虫から陰鬱な二重が誕生する。いつわりの光りで日毎に喋舌りながら現實を片づけてしまふのだ。おれには眞黒な鏡で世界を征服する他に別段名案も浮んでは來ない。いつでも無に始まつて無に終るのだ。一切の記憶のイリュウジョン。寂寥と夢の炎はるやうなまぐはひ、時劫の心臓の中に、空間を包んでゐる自分と云ふ存在。凡ゆる偶然は危機を胎んでゐる。脚下を照らすがい。

いつでもグズグズして損ばかりしてゐるのだ、驢馬のやうな脳味噌を持つて生れて來た罰だ。壊滅はおまへの足もとに轉がつてゐる。狂犬はいつでもおまへの面前に躡まつてゐるのだ。血みどろの爪はおまへの周圍に林立してゐるのだぞ。



洪水が水中から、火中からその頭を擡げてゐるぞ。日輪はその光線を集めておまへの前額をねらつてゐる。用心しないとすぐにやつつけられてしまふのだ。疲れたら洞穴の中に這ひ込んでねるがいい。美しい無力の魅惑！ 其處では最早苦しむ用はないのだ。無感に、岨の領土に支配されて、一切の力と形體を忘却しろ！ おまへの影は恐らく一個の鍵にしか過ぎぬ。

.....  
辻潤は遙々と巴里へ来て、酒を吞まず、淫賣も買はずにひたすら忘想の奈落に轉落してゐるのだ。畫家のHはおれの意久地のないのを嘲けり嗤つた。ホテルの主婦さんはおれを憐れんでくれた。さうして、おれの部屋のことを馬小屋だと云つた——恐らく豚小屋だと云ふだけの智慧がなかつたのだらう。おれは黙つて「立耳軒眼目」に没頭してゐた。ホテルの親父はおれを狂人扱ひにした。おれは昔讀んだ漱石の「文學論」の序を思ひ出して微笑を禁じ得なかつた。

仕方がないので、クロード・キヤヌにゐる無想庵に宛てて手紙でも書くことにしやう。

「僕はこの一二月と云ふもの毎日殆んど外出せず、部屋にばかり閉ぢ籠つてゐる。人が来て誘ひ出してくれぬ限り、たいいていベッドの上で暮らしてゐる。偶に出てタバコを買ひに出る位なものである。同宿の人達もあまり僕が出かけないので、病氣ではないかと云つて心配してくれる。さう云へば、僕はたしかに病人に相異なるのだ。別段、珍らしくもないノイラステニヤに罹つてゐることは自分にもよくわかる。わかつてゐながらどうにも出来ない——それだから確に病人に相異なるのだ。酒をやめるとすぐにこの通りだ。晝中はたいいてい横臥してゐる——夕飯をすまして燈火がつくと、やつと起きて机に向ふ。こんな風な生活はだが自分としては珍らしくはないのだ。昔、叡山にゐた時もさうだつた。或る時などは夕方四時頃起きて洗面所へ行つたら、珍らしく早いと云はれたので、ほんとうに早く起きたのかと思つて嗤はれたことがあつた。こんな風に外出しなくなると必ず晝夜顛倒の生活が始まるのだ。たしかにノイラステニヤに相異なる——「おれは今、眼を醒まして、暗いくらい……白い蝶々が飛んでゐる……」と云ふやうな文句を半ば無意識にくりかへしてゐる自分を見出して、少々變な氣持になつてゐる。多分、夢の中の聯想作用で、



そんな文句を口吟んでゐるに相異なるのだが、どんな夢を今迄に見てゐたのだから、考へても更にわからない。勿論、わからないのはその夢のことばかりではない。

「くらい くらい 白い蝶々が羽ばたいてゐる……まったく暗いのは自分の心の中ばかりではない……」存在の底知れぬ暗さなのだ。意識がかすかに白い蝶々のやうに閃めいてゐる。さうして珈琲の香りが煤けた羊のやうに見えるのだ……！

「母からよく手紙が来るが、まだ一度も返事をやらぬ。書くことがなんにもないからだ。自分がY紙への通信を續けてゐる限り、自分が丈夫で生きてゐると云ふことなのだから、それで自分は安心してゐられる。恐らく母は僕のことよりも一緒につれてきた孫の方をよけいに心配してゐるに相異なる。

「離れてゐる時にのみ、人は眞に自分の愛するもののことを深く思ふことが出来る。その時の氣持は純粹で甚だ美しい。親しい人間が時々離れてゐるのも中々わるくはないものだ。

「昔、或る女が僕にこんなことを云つた——若し離れてゐる時、自分のことを思つてくれ

るなら、ギナスを見る時に、あの星を私だと思つてくれと云つたことがある。だから、僕は巴里に來ても、黄昏にギナスの姿を見るといつでもその女性のことを思ひ出すのである——」

ノイラステナヤとノスタルヂヤに悩まされながら、僕はいつになくサンチマンタルになつて、暇のあるに任せ、いい氣になつてこんなことを無想庵に書き送つた。

「……時間を切斷する 空氣を壓搾する 赤ん坊が生れる 舌を出す ペロリと舐める  
絞め殺す 排泄する スリツバアを腰にぶらさける X Xする 覗く 逆にする 匍匐する  
罌丸を蹴上げる キャラーフから飲む 吐く 亡べる 階段 階段 階段 天井を突き抜ける 眞赤な日がクルクル廻轉する 鴉が一羽ミシエル アンジユの教會の屋根にとまつてゐる……」

偶然ひろつた古ほけた手帳をなんの氣なしに開らしてみたらこんな文句が書きつけてあるのだ。おれは欠伸を噛み殺していつものベンチに腰をかけ、池の水に映つてゐる柳の影



を茫然り凝視めながらタバコを吹かしてゐた。——それからまた二三枚手帳をはぐつて見ると詩のやうなものが書きつけてある！

代名詞「予」

よほど氣をつけないと

夜がやがておれのところへやつて来るぞ

氣ぜはしい太陽が空の向うに 地球の向うに 海の向うに沈む前に

夜につかまるとおれは動けなくなつてしまふ

街にはひよろながい燈がとほり

小さい恐ろしい猫奴の金屬性のわめき聲

用心しないと危いぞ！

.....  
これでも詩か？——と自分は吐き出すやうにその古手帳を投げ棄てた。夕日が赤々と沈む

みかけてゐる……白鳥が首を延して静かに遊んでゐる、頭の赤いキャナールが二三羽芝生の上を無恰好に歩いてゐる。

おれは心臓も頭も紛失したスケルトンのやうにタバコを吹かしては柳の影を眺めてゐた。夕闇がせまるとエトランジエの心の悩みはまことに果てしも知れぬものである。しかし

ず、モンマルトルのジャズトリキウに赴かざらめや——呵々。

モンスリイ公園のレストウランで夕飯を食つてホテルの部屋にかへると、マルセルノルから手紙が來てゐた。彼は先夜偶然モンバルナスのキャフェ セレクトで肝膽相照らしたエスバニヤのボヘムなのである。

奇蹟とは神を逃がれることだ

美は奇蹟の中には存在しない

美は一日にして足る——現實のシャルムを認識するためだけの

などと云つてゐる。頗ぶる生意氣な奴だ、「君の美學は蓋し猫婆アの尻を拭ふにあるらしいが君の天才の爲めにおれは甚だ惜しむ、乞ふ自重せよ」と云ふ返事をしてやつた。李太白の



詩を譯せと云ふのだ。「飄蕩」と云ふ文字を説明してやつてもわかりはしまい——むだなことだと思つだが、つい安受合をしてしまつたのだ。

——なにを見たかね？

——なにを云ふのか？

——巴里は面白いか？

——面白いかつマラヌか——自分でわかつてゐるだらう。そんなことをきいてなにになるのだ。

——黄色い茄子がころけてゐる。泥をなすりつけてゐる。異人に舐められてゐた。銀行にはいつでも金が預けてあるのだ。アレルヤ アレルヤ アレルヤ アレルヤ——わかなければノクタンビユールに出かけて見るがいい、シヤンパンはラムネよりは少しはうまいやうだ。

シヤンゼリゼエは日本の銀座と云ふプールバアルより勿論幅がひろいよ。このあひだ凱旋門からノウルウエイの軍人が飛び降りて自殺したのを君は知つてゐるか？ エツフェル塔

を見物に行つたら雨に降られた——それから姉妹の淫賣につかまつて珈琲を奢らせられたよ。姉妹で縁いでゐるがケンカをしたことがないと云つて自慢をしてゐたよ。「日佛」にゐるNと云ふ男が色々親切にしてくれるのだ。こなひだもキャヴォ・イロンデエルと云ふオスカアワイルドが晩年によく出かけたと云ふ洞窟のやうな飲屋に引つ張つて行つてくれたよ。パンジヨウとギタラをひいてクダラヌ流行唄や、軽口や、踊りををどつてゐるが——別段、面白くもなかつた

なにか非常に愉快な話はないかね？

タイクツしたと云ふ話かね

恐らく！

昔、支那にハンペンと云ふ社會主義者がゐました、或る時、陛下から「如何にせばタイクツを脱却し得るか」と云ふ質問を頂戴いたしました時に——「生きとして生ける一切を殺して、ありとあらゆる死せるものを復活せしめよ」と答へました——これはどうかかな？

一寸面白いね



—では、また昔、支那にシンブウと云ふ男がゐるが、或る時、彼の友達から「如何にせば完全なる幸福を獲得し得るや？」と云ふ質問を受けました。その時、シンブウ答へて云ひけらく「おお親愛なるクンチャンよ、汝の泉に游ける月を誘惑せんとせば、先づ如何なる餌を用ひべきかを默想せよ」と——これはどうかね！

—中々面白いね——支那と云ふ國はまつたくわれわれ異人には想像がつかんね——君は支那を知つてゐるか？

—知らんよ——來る時に一寸上海を覗いたばかりだ。支那に對する智識は少數の古典を少しばかりかじつただけだ——支那をほんとうに知らうと思つたら大變だらう

—もつとなにかないか？

—君はバンジャマン ペレと云ふ男を知つてゐるか？

—知らんよ。

—では、巴里のシユール・レアリスムスの運動に就て少しは知つてゐるか？

—少しは知つてゐる——僕はクウボールでフィリップ・スウボウと云ふ男に時々出遇

ふ——

—ペレもかれ等の仲間のひとりだ、おれは幸ひ今、彼の書いた斷片をノートに寫して持つてゐるから、なんなら讀んできかしてやらうか？ 支那の噺も面白いがコイツも中々馬鹿には出來んよ

—ではきかせろ

「——蠅のやうに敲きのめされて、水挿の底で眼を醒ますと云ふことは、君達がそこから出て五分と経たぬうちに、君達のおふくろを打ち殺すことになつたとしても決して無理のないことだ。恰度、そんなことが或る朝おれに起つたのだ。おれの頭が今雛菊のやうな形になり、おれの肩が兩方とも膝までメリこんだからと云つてなにも驚ろくにはあたらぬのだ。眼が醒めてから暫時の間と云ふもの、おれはいつでも水挿の中で生きてゐるやうに考へてゐた。若しおれが水挿の向う側でヤケに嘴を突つてゐる鳥のやうなものを見なかつたら、恐らく今でもさう信じてゐるに相異なる。まつたく其奴に感謝するが、おれが今どんな偶然なしかも耐らなくやりきれない状態に置かれてゐるか」と云ふことがハッキリわ



かつたので、おれはムシヤクシヤに腹を立てた。おれはいきなりおれの傍にある枯つ葉を  
掴んでおれの左りの鼻の穴の中に突つ込んで、叫んだ——「全體、犬が人間の友達だつて  
法があるか？ 蝸牛が正覺坊の敵だつてえのは本當か？」すると、水挿のテツペンから硝子の  
割目が唸りやきやがつた。——「可愛想な白痴よ！ 敵と云ふものは愚衆の考へるやうな阿  
呆なものぢやない。第一敵は髻を生やしてゐる。それからかれ等の頭はセルロイドの屑と  
馬鈴薯の皮剥きから出來あがつてゐるのだ。友達と云ふものはガラスの頭をした傳導帶の  
やうに噛みつくものなのだ」

「おれは負けずに主張した——「蠅は時計の針の上では死なないと云ふのはほんとうか？  
薬は肉團子を造るに使はれると云ふのはほんとうか？ 蜜柑は豎杭から湧き出すと云ふの  
はほんとうか？ ボロンニヤは盲人から出來あがつてゐると云ふのはほんとうか？ 鶉が  
牝羊を搾取すると云ふのはほんとうか？ 噪音が城塞の中で紛失すると云ふのはほんとう  
か？ 風呂場がピアノの中に消え失せると云ふのはほんとうか？ 暗黒な部屋では夢の唄  
が決してきこえないと云ふのはまつたくか？」

すると、彼は湯沸しが石段の上にくろけ落ちるやうなひどい音響を發したが、まもなく  
小さい口がおれの牢屋の中に現はれた。幸ひなことに、ソイツが間もなく汽車のトンネル  
のやうな形になつて來た。さうしてその入口に小さい生き物が現はれた。見ると鱒のやう  
でもあれば、蝶々のやうでもある。おれば最早ひとりではなかつた。だから、おれはあま  
り慌てないで水挿を出やうとした。しかし、それがどツちでもまつたく同じことのやうに  
見え始めた。そのサアデインのやうな蝶々に一緒に生活しろと申し立てることは別段むづ  
かしいことでもなかつた。多分、彼女もイヤだとは云ふまい。なぜと云ふに彼女はかなり  
いとやかでやさしさうだつたから、——だが、おれは敢へてそんな申し立てはしなかつた  
多くの人間はそれを不思議と思ふかも知れない、だからと云つて別段それは異常なことで  
もない。たとへば往來の人間の頭を割るために六階から群集を目がけて、舗道の石を投げ  
つけるのと大差はないのだ。ただ世間と云ふところはおれが水挿の中で孤獨に生きるより  
もサアデインの蝶々と一緒に生活する方がもつとスキヤンダラスだと云ふのだ。だからそ  
の可愛い奴におれはなんの申し立てもしなかつたやうなわけだ。實際、水挿の中に這入る



と、彼女の翼がもげ、尻尾も鱗も見えなくなつてしまつた。さうして怪し氣な煙りを残して一條の光り物が彼女の頭から立ち昇つた。するとその代りに看板が現はれた。それには SCORPIO N200KMI20 と誌されてゐるのだ。再びおれは猛烈な激情を發し、その看板を掴んで硝子の壁に向つて力一杯敲きつけた。驚いたことには、その看板は水挿を突きぬけ二度モンドリを打つて粉微塵に碎けてしまつた。その時だ、おれは始めて自分が麥畑の上に仰向にひつくりかへつてゐるのを見出して吃驚したのは。おれは兩脚で立ちあがらうとすると二十羽の石鷄がおれのポケットから飛び出した。多分今まで長い間にそこに隠れてゐたに相異なるい——勿論、おれは今までそれに氣づかなかつたのだ——かれ等はおれの手の掌に恐ろしく澤山な卵をひりつけて行きやがつた。「氣がついて見ると麥畑はどれもこれも同じやうに上等だと思つた。やつとのことでおれは自分の生れた時の垂直の姿勢をとりかへすことに成功した。それから八方に唾の球を吐き散らした。それが一陣の風と共に飛び去つて、その後から眼に見えない狩人の彈丸が追ひ馳けた。おれは、恰かもその時、無邪氣に日向ほつこをしてゐた可愛い小さな白い土龍を踏み潰さないやうに用心しながら

溝の中へ匂ひ昇つた。まつたく其奴等は千載の一遇とも云ふべき好機會を樂しんでゐたのだ！ 勿論、おれはかれ等にとつてまつたく見ず知らずの他人ではあつたが、かれ等の物語りをきかせずにはゐられなかつたものと見える。蜻蛉のやうな羽を生やしてゐる恐ろしく小さい白い土龍が次のやうに語りだした

——一寸待つてくれ

——もう澤山か

——咽喉が少し渴いて來た

——おれも少しくたびれてきた

——では、この次にまたきくことにしやう

——それがよからう

僕はエスバニヤのチゴイネルの種屬であるノルとこんな會話をとりかわしては夜をふかしたのだ。彼は恐ろしく巴里で怠屈をかんじてゐる人間のひとりなのだ。

——おれは無一物だ。おれには全體ステイルと云ふやうな物さへない。なる程、友達は



二三あるやうでもあるが、かれ等はひそかにおれの友達であることを誇りとしてゐるとも思へない。寧ろなきにしかずだ。森の城塞は手中の小鳥ではない——彼はこんなことを口吟むのだ。

すでに自己を魅惑する事物を一切紛失してしまつてゐる人間にとつて、一本のタバコと一椀の茶と、静かなる寢床と、仰臥して白雲を眺めること以外にそこになにが存在してゐるのか？

路上の閑人——人生の食容である僕に諸君はそもそも何を期待すると云ふのだ。

埃及の砂漠には如何にも一輪の眞赤な花が咲いてゐた。アデンの鉛の山にはベスト菌が巢を食つてゐた。ひとりの若きアラブの男は白き齒をむき出し、贗物の指環を僕の指にはめ、デンマルクの商船の客室から盗みとつてきたダイヤの指環と稱して僕にそれを買ふことを強ひた。また如何がはしき媚薬の小瓶をとり出して、怪し氣なる形を拳に表はしながら、薄氣味悪き笑を浮めるトルコの老爺もゐた。

すべて欺かれることは愉快なる人生の快樂である。新聞を見よ——そこには幾多の廣告

と稱するものが掲載せられてゐるではないか？かれ等は悉く赤き舌を出して愚かなる驢馬を釣らんとしてゐるのだ。廣告を失つた人生の如何に寂しく慘めなることぞ……



どりんく・ごうらうんど

Shameless——つまり恥知らずにならなければ作家にはなれない——とジョウヂ・ムウアが云つてゐるが、作家と云ふ程の人間でない場合でも凡そ文士などと云はれる人間なら多少ともみな恥知らずでなければ務まるわけのものではない。否、この世の中に蠢動してゐる人間共はみんな或る意味で業を曝らし、生き恥をさらしてゐると云つても差支ひあるまい。神経の人並外れてデリカな者ほどそれを泌々と骨身に答へて感じるのだ。かういふ意味で世に藝術家の靈魂ほど血みどろなものは恐らくあるまい。同時に自分を柵へあけて他人を裁く階級にゐる連中程良心の麻痺してゐる無神経者もあるまい。

云ひかへれば良心の強い人間程、己の恥知らずであることをより鋭く感じるのだ。

私は最近偶々アルツイバアセフの「作者の感想」を讀んでゐる中に——神は私に凡そ作家

の運命にふりかかり得べき最大の不幸を與へた——私は誠實である。——と云ふ言葉を發見した。

勿論それは彼自身の靈魂に對して誠實であると云ふ以外のなにものをも意味してゐないのだ。

自分がなに故にかくの如き言葉を冒頭に掲げたかは讀者の推量にまかせる。

凡そダイストにとつてはこの世に許され得ない言語行動など云ふものは一つとして存在し得ないのである。——しかし彼がその中のなにを撰擇するかは彼の個性によつてきまるものだ。彼はなにを撰擇しなければならぬかと云ふやうな一切の義務をも責任をも感じてゐないのだ。

アプリアオりの世界は恐らく彼の眼前からはいつでも消滅してゐるのだ。

夜ふかしをし、酒に溺れ、女に戯れ、賭博を行ひ——それを又誇らし氣に得意然と書き



たてて生活の資を得、世間から虚名を博して先生とあがめ奉られること——唯單にそれだけであるとしたら、まつたく「文士」と云ふ職業ほど世に羨望に價するものはなく、猫も杓子も小説家になりたがるのは無理もない話である。

しかし、それは偶々作家の生活に現はれた一面の結果から推量された極めて皮相な觀察に過ぎないことは云ふまでもなく、それから作家以外の人間の生活はみんな規則正しく道徳的であるかと云へば……それは問題にもならない程馬鹿氣た考へ方で、かれ等は唯だそれを公衆の面前にさらけ出さないと云ふまでに過ぎない。

私は自己強辯をやつてゐるのではない。——これまでも自分と云ふ人間はかなりあからさまに自分の生活をさらけ出して生きて來た。これ以上自分をかくしだてする何等の必要をも義務をも感じてはゐない人間なのである。

考へると自分のワガボンダアジユの生活もあまり短かいは云はれない——よく今迄生きて來られたものだときへ時々泌々思はれることさへある。しかし、先輩坂本紅蓮洞氏などのことを思へばまだ自分などはほんの青二才に過ぎないではないか——そんな風に考へる

こともあるのだ。

道樂と云へば私にとつては先づ讀書と酒とである。それを取り去ると私の生活がゼロになつてしまふと云つても差支ひはない。

今では自分がなんの爲めに讀書し、なんの爲めに酒を呑むのだからわからなくなつてしまつてゐる程、それが第二の天性になりきつてしまつてゐる。

私は此處でとやかく酒の効能を論じ立てやうとするものではない——しかし、私にとつては少なくとも酒は自分をこれまで生きながらへさしてくれた命の恩人だとさへ時に考へられるのである。

前置が些さかなくなり過ぎたやうだ。

倫敦ならばピカデリー、巴里ならモンマルトル、日本の帝都ならば淺草……

私は震災後しばらく旅で暮らしてゐたので歸つてきてみるとまるで様子が変わらなくなつてゐた。七八年前の淺草ならば私は手のウラをかへすやうに知りぬいてゐた積りだ。

幻のやうな赤い塔のなくなつてゐるのも實に淋しい、全體が恐ろしくプロゼイックにな



り果てて少しもミステリアスな趣きがない。

それでも私は昔馴染みの白木の殿堂が復活してゐるのを發見して久しぶりで其處へ腰を落ちつけた。

そこは澤の鶴を飲ませる純粹な繩暖簾で如何にも瀟洒として女氣がないので私達はそんな風に命名してゐるのだ。元の合羽橋通りで六區の入口に近いなか屋と云ふ酒場なのだ。今頃ならばいつでもたいてい「青柳」がある——私はそれを目的にして出かけたものだ。勿論、フトコロ勘定から打算しての話だから、あながちさうばかりとも云へない。

由來、僕は繩暖簾黨なのだ、その上酒でも食い物でもまるで日本人だ……かう云ふ自分がないか外國人らしいが、現代の若い人達はどちらかと云ふとたいてい洋服をきてトンカツを食べ、まづいコーヒーに舌鼓を打つてゐる連中が多いやうだ。

従つて私はカフェへはあまり出かけない。なぜならカフェにはうまい日本酒がなく、第一あつたにしろ酒の肴がない。

先づ振り出しには飛び切上等な酒でなくつては我慢がならない——勿論、酔つたら最後

萬事萬物はダダのカレイドスコープだ。

繩暖簾ではイヤに氣取つたり、濟したりしてゐる連中は一人だつてゐるやあしない。勿論カフェのやうに女給を張りに來るやうな種類の客は一人もゐず、女中がゐるても客に遠慮してゐるやうなのは滅多になく、マゴくするとアベコベに客の方がやつつけられるやうな手合の方が多量位だ。

繩暖簾なら一人で出かけても少しも淋しくはない。全體、酒香みと云ふ者は *Sans Reve* なものだが、プロレタリア氣分が横溢してゐる酒場では殊にみんなが期せずしてタワリシチイで、始めて顔を合せた人間でも三年も馴染んだチンコロのやうに酔へば必ず饒舌り合ふのだ。御相互にあまり無遠慮過ぎてツイ喧嘩も始まるのだが、それ位はかへつて人間味があつて面白く、汽車の二等室や電車の中で御相互に口を利けば損だと云ふやうなツラをしてゐる人間が一人もゐないのが何より嬉しい。

一三本平けて少し氣持がよくなつたので、噂にきいてゐた宮戸座のそばのカフェ・アレキサンドリヤへ行つてみた。なる程、四五人の露西亞婦人がゐる。しかし、注文したカルヴス